
FAIRY TAIL ～妖精の化物《フェアリーモンスター》～

天翔る墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL ～妖精の化物～
フェアリーモンスター

【Nコード】

N4563Z

【作者名】

天翔る堕天使

【あらすじ】

ある日、俺は大学から帰ってきて直ぐに昼寝をしていたはずだった。目が覚めたらそこには神様が座っていた。神様のミスで死んでしまったために、俺は他の世界に転生してそこそこ暴れます。

作者はかなりの初心者です。

駄文や、少ない戦闘描写は多めに見て下さい。

ゝ プロローグ的な ゝ (前書き)

どうも、天翔る堕天使です。(キリッ？

今回が始めての投稿になるので、暖かく見守ってください。(ゝ
>)

では、どうぞよろしくお願いいたします。

く プロローグ的な く

目を覚ますとそこは白をモチーフにした落ち着いた感じの部屋だった。

俺

「見覚えのない天井だ。」

よし、間違えたからもう1回言い直すか。

俺

「見覚えのない天井だ。」

さて、こういう場面にはこんな感じのお約束がある筈だ。

確か俺は、大学から普通に帰って来てすぐに睡眠をとっていたのに、何故か起きたらこの部屋にいた。

少し警戒しながら辺りを見回すと、色々な家具が数点、観葉植物が2つ、そしていかにも神様のような感じがする、白いローブを着た男の子が1人椅子に座っている。

俺

「どゆこと?」

神様

「気がついたかな？ちなみに僕は神様だよ。よろしくね、お兄さん！」

俺

「よろしく。」

神様

「お兄さんって、かなり落ち着いてるよね。普通なら、軽くパニックはおこるよ？」

俺

「残念ながら俺はそういう小説とかを読んでたから？？？
？　　ん？そういえば神様、俺が死んだ覚えが無いんだが。」

神様

「はい、それは僕が、誤ってジュースを溢^{こぼ}して、濡らしちゃったから、それを乾かす為に、ストーブに近付けたら、灰にしちゃったんだ。」

「たぶん、そのせいで気がつく前に、死んじやったのかな。」

「だから、謝罪と一緒にどこか好きな所に転生させようと思っ
て呼んだんだよ。」

俺

「Oh？　？　？　？」

つまり俺は今、目の前に座っている子のおつちよこちよいな、
神様^{トジメッコ}
のミスで死んだらしい？　？　？　？

俺

「じゃあ早速^{さっそく}で悪いけど、『FAIRY TAIL』
能力とかはどうすればいい？」

神様

「うん、そうだな？　？　？　？　？　能力は5個と特殊アイテム1個にしようかな？」

5個か？？？？？何にしようか？？？特殊ア
 イテムもどうするかな？？？？？。

5分後

俺

「決まっ
たから
言うぞ」

神様

「いよ」

俺

「1 個目は、『とある魔術の禁書目録』に出てくる、一方通行のベクトル操作能力が使用可能。

2 個目は、『ONE PIECE』に出てくる、覇王色、武装色、見聞色、の3種類の覇気が使用可能。

3 個目は、海外ゲームの『Prototype』にでてる、アレックス・マーサーの全能力MAX状態。

4 個目は、1 万年に 1 歳さいだけ歳としをとり、尚なお且かつ 29 歳にな
ると老けなくなる。

5個目は、丈夫な身体

特殊アイテムは、【死んで無い限りならどんな病やまいでも治せる薬】で、形はなるべく簡単に運べる位の大きさ。」

神様

「じゃあ送るよ？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？
？　？　？　？　ふう、オマケとして、1個目の願い事には触る
だけで成分とか、色々と理解が出来るようにしたいから」
「あとこれが、さっき言ってた、お薬だよ」つ薬

俺

「ありがとう」

神様

「じゃあ、そろそろ【FAIRY TAIL】の世界に、行っても
らいまゝす。それとこれを、落とさないで持っててね。」

そして何かを渡してきた、これは　？　？　？　？　？　？
携帯電話？

神様

「じゃっ　？　？　？　？　？　行つてら」ガチャン←

パカッ

俺

「えっ？」

ヒューーーーーーー

俺

「ッ――――！！！！！！！！」

神様

「あつ」

「俺SideOut」

主人公の説明や、細かい能力の説明（前書き）

どうも、天翔る堕天使です（キリッ！

今回はオリ主の能力説明なんですが、かなり長いのでザックリと軽く見て下さい。

ではどうぞ、 、 、 （ノ

主人公の説明や、細かい能力の説明

名前 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? アレックス ? マーサー

次回からは、『俺』から『アレックス』と書き換えます。

性別 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 男性

一人称 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 俺

容姿

【服装】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 革ジャン〔黒〕+フ

ード付きジャンパー〔茶〕+襟付きの長袖シャツ〔白〕+ジーパン

〔青〕+革靴〔黒〕

【目】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 青色

【髪】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 茶色

【身長】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 180センチ

【体重】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 80キロ

【年齢】 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? 22歳

備考

・身長と体重は、自分の現在の状況。(笑)

・年齢は原作に合わせる為に、減らしました。

~~~~~1個目の能力説明~~~~~  
アクセラレーター

一方通行のベクトル操作能力。

運動量・熱量・光・電気量etcといった、ありとあらゆるベクトル(向き)を観測し、触れただけで変換する能力。

普段は『反射(ベクトルの反転)』に設定されており、身体の外

囲を覆<sup>おお</sup>うわずかな保護膜<sup>ほしまく</sup>に触れた全ての攻撃を、自動的に跳ね返してしま<sup>う</sup>う。

保護膜に接してさえいれば密着していなくともベクトル操作が可能であり、『膜に接触している』巨大な物体として、暴風操作や自転の操作を行うことすら可能である。

受動的な『反射』だけではなく能動的な能力としても優秀で、血流逆転・体内電流操作による心臓麻痺や洗脳、鉄柱飛ばし・身体運動増幅・風向操作によるM7クラス<sup>の</sup>暴風、竜巻、飛行・高電離気体・再生促進・自転操作・レールガン以上の速度の石礫<sup>？ ？ ？ ？ ？</sup>など戦闘方面に限らず多岐にわたる応用が可能。

感知能力でもあるため、低周波や放射線など五感で認識できないベクトルも観測できるし、変換できる。

反射といっても万物を拒絶しているわけではなく、物理法則に従って有害と無害のフィルタを無意識のうちに構築し、生活に必要なもの（必要最低限の酸素や重力等）は反射しないようにして、『それ以外の全てのベクトル』を反射するように設定されている。

自分の意思次第で、有害な音なども反射可能。そのため未知の力であっても『それ以外のベクトル』と認識して反射可能である。

~~~~~2個目の能力説明~~~~~

『ONE PIECE』に出てくる、霸王色、武装色、見聞色、の3種類の覇気。

「見えない鎧を着るようなイメージ」を持ち、より固い鎧は必然ひつぜん的に攻撃力にも転じる。実体が無いものに対して、攻撃ができる。この「武装色」の覇気がこの世で唯一ただひとつの対抗手段であるということ。この力は武器に伝わせることもできる。

『Prototype』の、アレックス・マーサーの全能力MAX状態。

変装 へんそう
偽装系 ぎそうけい
アレックス

変装を解いてアレックス本来の姿に戻る。

？ ？ ？ デイスガイス DISGUISE（へんそう変装）

あなたが接触した人誰でも吸収し変装出来る能力です。

吸収する事によりその人物の特殊技能、知識、及び外見へのアクセス能力をアレックスに与えます。

デイスガイス 【DISGUISE】

■ コンスーム CONSUME パワー POWER

捕食能力

■ コンスーム CONSUME ブースト BOOST

捕食時の体力回復量が増加する。

■ ステルス STEALTH コンスーム CONSUME

「ステルスしながら」

目標が声を上げる前に、速やかに捕食する。

発動するためには、捕食対象を含む周囲のすべてが、アレックスのことを視認していない状態でなければならない。

■ デイスガイス DISGUISE パワー POWER

変装能力

ぼうぎょけい
防御系

？ ？ ？ アーマードフォルム ARMORED FORM（そうつけいたい装甲形態）

バイオマスを身体表面に噴出させ、強固な防弾能力を発揮します。

鎧兜の様なこのフォームで体を覆えば、

眼前の敵を粉碎し、最も強力な攻撃でさえ無効にする、止める事の出来ない力を得られます。

■ アーマードフォルム ARMORED FORM

全身を装甲で覆うことにより、全方向からのダメージを軽減し、ダッシュ時に敵や車両を吹き飛ばし、ダメージを与えることが出来る。

発動中は移動速度が低下し、グライドGLIDEが使用不可能になる。

? ? ? シールドSHIELD (盾)たて

左腕をバイオマスで形成された骨状のシールドに変える事ができる。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」

■ シールドパワーSHIELDPOWER

前面に盾を形成し、前面からの攻撃を大きく減衰するほか、ダッシュ時に敵を吹き飛ばし、ダメージを与えることができる。防御力はArmoredFormより高い。

発動中にGlideを使うことが出来るため、Combatスキルの奥義BulletDiveを活用できる。

移動速度の低下も発生しないため、機動戦に向いている。

こっけきけい攻撃系

? ? ? ブレイズBLADES (刃)やいば

右腕を一度で5、6人の敵を切る事が出来る骨状のブレードに変える事により、敵を真つ二つに切断する事が出来ます。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」

■ ブレードBLADE エアAIR スライスSlice

ブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。 下方向への追尾性能は高い。

■ ブレードBLADE フレンジーFRENZY

走りながら左右にブレードを振り回す。 追尾性能はそれほど高くない。

？ ？ ？ クローズ かぎづめ
C L A W S (鉤爪)

アレックスの手は相手に致命傷を負わせる事の出来る骨状の鉤爪へと変わり、 変形後の彼は即死を与える殺人マシーンと化します。

■ クローズ パワー
C L A W S P O W E R

攻撃力は並だが、振りが素早く、少数の人型敵と戦うのに向いているが、

グランド G R O U N D S P I K E 以外に目立つた対装甲能力を持っていないのが欠点。

■ グランド G R O U N D S P I K E

地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。

また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能。

■ ダンシング D A S H I N G S L I C E

「ダッシュ中」

地面を滑るように移動し、爪で一発だけ薙ぎ払う。 攻撃力はそこそこだが、非常に高い追尾性能を持ったため、

敵と交差するように使つと、敵の背面まで回って斬りつけるような機動を取る。

？ ？ ？ ハンマーフィスト てっついけん
H A M M E R F I S T (鉄槌拳)

数百ポンドものバイオマスの塊を両方の拳に移行させる事により、 鋼や人骨すらも粉々に破壊する巨大なハンマーへと変わります。

■ ハンマーフィスト H A M M E R F I S T P O W E R

攻撃力は高く、攻撃速度はかなり遅めだが、極一部の攻撃以外は範囲攻撃能力を持っており、振り回してるだけで周囲の物を吹き飛ばしまくる。

ノーマルアタックによるコンボは、3段階目の打ち上げ以外は全て範囲攻撃。

ハンマーフィスト

スモークダウン

■ HAMMERFISTSMAACKDOWN

大きく力を貯めて、地面に向かってハンマーを叩き付ける。

ダメージは見た目ほど強くはないが、非常に広い攻撃範囲を持っため、

周囲を囲まれた状態で威力を発揮する。

ハンマーフィスト

エルボースラム

■ HAMMERFISTELBOWSLAM

「ジャンプ中」

下方の敵に向かって飛び込み、強烈な肘打ちを繰り出す。

ダメージはそこそこといった感じだが、追尾性能と攻撃範囲はかなりの強力。

ハンマートス

■ HAMMERTOSS

「ダッシュ中」

ハンマーを突きだしたまま、走行中の勢いを利用して敵に飛びかかる。

ハンマーは敵の懐に入れないと真価を発揮できないため、敵集団に突撃を掛ける時には有効に働く。

？

？

？

マッスルマッス

MUSCLEMASS（きんりよくぞうきょう筋力増強）

アレックスの腕の筋力を増強させ、両腕の力の焦点を合わせる事で敵により大きなダメージを与えられます。

マッスルマッス

パワー

■ MUSCLEMASSPOWER

素手状態の攻撃ダメージを強化。

戦闘中に発揮できる機動性能は全能力中随一。

■ マッスルマッス MUSCLE MASS THROW スロー
Muscle Mass 発動中は、投擲によるダメージと投擲射程を強化する。

? ? ? ウィップ WHIPFIST (鞭の腕) むち うで
素早く襲いかかる事が出来る非常にシャープな鞭は敵を半分に切り裂き、離れた場所にいる敵を引っ張ります。

「今回は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」
■ ウィップ WHIPFIST POWER フィストパワー
横方向への範囲攻撃と、奥行きに対する長射程攻撃に関してはまさにエキスパート。

非力そうな印象とは裏腹に、十分な攻撃力を備えており、驚くほどの射程もある。

そして威力も高めなので、離れた場所にいる敵に対して有効。
■ ストリート STREETSWEEPER スワイパー
横方向に大きく腕を振るうことで、周囲の敵を両断する。

これまた、技の印象とは裏腹に威力が高く、敵を一掃するほどの破壊力を持つ。

■ ロングショット LONGSHOT GRAB グラブ
腕を伸ばし、遠方の目標を掴む。

軽い目標は引き寄せ、重目標は自分がその場まで飛んでいく。

しかくかんちがい
視覚感知系

? ? ? サーモ THERMAL VISION (熱源視覚) ねつげんしかく

サーマルビジョンは、あなたの視界が狭くなるリスクと引き換えに、煙で覆い隠された場所や障害物が有る場所での見通しをよく

する事が出来ます。

■ THERMAL VISION POWER サーモレシジョン パワー
煙幕効果を遮断したり、感染者を見分けやすくする。

? ? ? INFECTED VISION インファクティッド ビジョン (感染者視覚)

あなたの視覚を変更して、潜行性の感染症が人々に忍び寄るのを検出して下さい。そうする事で、激しい感染を標識の様に際立たせ、ウイルスに汚染された目標を明らかにする事が出来ます。
「今回は、ご都合主義で『ウイルス』」「風邪とかのウイルス」ということで、ご理解して下さい。」

~~~~~ 『特殊能力』 ~~~~~  
ムーブメント

【MOVEMENT】

O AIRUPGRADES エア アップグレード

■ AIRDASH エアダッシュ

「ダッシュ（空中）」

空中で大きく加速する。 加速度が非常に高いため、Glideと組み合わせると、地上を走るより速く移動できる。

エア AIRDASH DOUBLE ダッシュダブル

Doubleで二回までダッシュ可能になる。

■ AIRDASH DOUBLE BOOST エア ダッシュダブル ブースト

「ジャンプ+ダッシュ」

をすると、上方向に向かって大きく飛び上がる。

■ GLIDE グライド

「ダッシュ+ジャンプ（空中で）」

両手を広げて滑空状態になることで、より長時間滞空することが出来る。

グライドは空中にいる間は何度でも発動できるため、「エアダッシュ↓グライド↓エアダッシュ↓グライド」

をやることで、ほとんど高度を落とすことなく高速移動をすることが出来る。ただし、飛翔ではなく滑空のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

エアリカバリー

#### ■ AIR RECOVERY

「ジャンプ（吹き飛ばされ中に）」

吹き飛ばされた際に身を捻り、素早く通常状態に復帰できる。被迎撃後にダッシュやグライドを使って回避運動を取れるため、文字通り、態勢を立て直すのに有用。

スプリント

アップグレード

#### ○ SPRINTUPGRADES

ドライフロール

#### ■ DIVEROLL

「ダッシュ（移動中に）」

前転。通常状態で出したい時はダッシュ後すぐ離すと出る。だがこのスキルの真髄は、様々な攻撃をキャンセルできる点だろう。

立ち通常はほぼ全てのフォームでキャンセル可能なので敵が振りかぶったのを見てから回避運動が出来るようになる。

スプリント

スピード

#### ■ SPRINTSPEED

地上での走行速度が強化される。

ジャンプ

アップグレード

#### ○ JUMPUPGRADES

ジャンプ

アップグレード

#### ■ JUMPUPGRADE

チャージジャンプによる飛距離が伸びる。

ジャンプ高度が上がる〓グライドで長時間飛行できる〓より高速で

移動できる、ということ。

■ ウォール ジャンプラッチ  
WALL JUMP LATCH

「ジャンプ（壁際で）」

壁を使った三角飛びを、何度でも使用できるようにする。

【SURVIVABILITY】 サバイバルティ  
クリティカル マスアップ

○ CRITICAL MASS SUPGRADESグレード アドレナリン サージ

■ ADRENALINE SURGE

アレックスが死亡寸前まで追い詰められると発動する。アレックスは短時間の間、完全な無敵状態となる。

○ ヘルス アップグレード  
HEALTH UPGRADE  
ヘルス ブースト

▲ HEALTH BOOST

自動回復能力：小～中

▲ HEALTH 《ヘルス》 ブースト BOOST 2

自動回復能力：中～大

○ ヘルス リジェネーション  
HEALTH REGENERATION  
リジェネーション ブースト

■ REGENERATE BOOST

アレックスの体力が一定値以下を切ったとき、体力が自動的に回復するようになる。Boostを重ねていくことで、自動回復可能な体力上限値が高まっていく。

■ リジェネーション ドレイ  
REGENERATE Delay

ダメージを受けてから、自動回復が始まるまでの時間を短縮する。

【COMBAT】 コンバート

○ エア  
AIR

フライングキック

フースト

#### ■ FLYING KICK BOOST

Flying Kickによる射程と威力を強化する。 Flying Kickは全編通して利用することになるため取得は必須。

フリップ

キック

ランチャー

#### ■ FLIP KICK LAUNCHER「Flying Kickがヒット中」

Flying Kickがヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げることで、追加ダメージを与えると共に、軽量の目標を吹き飛ばすことが出来る。

単純に、Flying Kickを強化できるスキルと考えれば、取らない理由はない。

フライング

エルボー

ドロップ

#### ■ FLYING ELBOW DROP

#### 「壁走り中」

下方向に向かって、肘を突き出したまま落ちる。

ボディーサーフ

#### ■ BODY SURF

#### 「人間限定」

Flying Kickの勢いを利用し、飛びかかった相手に乗って移動する。早い話、Flying Kickを当てた相手の、前方にいる敵を巻き込むスキル。

移動距離はちょっと短く、巻き込むことが出来る敵はそんなに多くない。

エアスタンプ

#### ■ AIR STOMP

#### 「空中で」

直下に向かって急降下し、衝撃波を発生させる。キックと違い、全く追尾無しで直下に降りるため、

もっぱら、攻撃目的よりは急降下するための手段として利用することが多い。

キャノンボール

## ■ CANNONBALL

### 「空中で」

空中で高速回転しながら、対象に向かって突撃し、対象と周囲の物体を破壊する。

また、対象の間にある軽目標は弾き飛ばしながら移動する。

高威力・範囲効果に加え、貫通効果までついたFlyingkickの上位互換。Flyingkickの後に続けて出すことも可能  
なため、空中二段攻撃が可能になる。

フレッド

ダイブドロップ

## ■ BULLET DIVE DROP

### 「Glide中に」

直下に向かって急降下し、非常に広い範囲に渡って衝撃波を発生させ、高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増す。

Muscle Mass発動中なら、さらに威力と攻撃範囲が増す。

スパイクドライバー

## ■ SPIKED RIVER

両手を振りかぶって、対象を地面に叩き付ける。     アッパー ↓ エア

コンボの後にしか発動できない特殊なスキル。

エアエフェクト

## O AREA EFFECT

グラウンドサター

## ■ GROUND SHATTER

地面を思いっきりブツ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす。

グラウンド

サタードロップ

## ■ GROUND SHATTER DROP

### 「空中で」

Ground Shatterの空中版。

高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増加する。やや緩やかではあるが、下方に向かって加速する性質がある。

Ground Shatterより打ち上げる力が強く、大きな相手

の姿勢を崩すほどの衝撃を発生させる。

ナックル

ショックウェーブ

## ■ KNUCKLESHOCKWAVE

「グラブ」

拳を打ち鳴らして衝撃波を起こし、周囲の対象を弾き飛ばす。

グランドスパイク

グレイビヤー

ダブステイ

## ■ GRONDSPIKEGRAVEYARDDEVASTATOR

地面から巨大な棘を何本も突き出し、あらゆるものに致命的なダメージを与える。かなり広い攻撃範囲と、極めて高い攻撃能力を持つ大技。

テンドウロー

ブラージ

ダブステイラ

## ■ TENDRILBARRAGEDEVASTATOR

全身から触手状の体細胞を幾重にも突き出すことで、周囲の目標を串刺しにする。あらゆるスキルの中でも最も広い攻撃範囲を持ち、攻撃力も非常に高い。

威力は Groundspike Graveyard Devastator には劣る。

グラアッポ

o GRAPPLE

グラアッポ

スラム

## ■ GRAPPLESLAM

「人型の敵をグラブ中に」

掴んだ人型の敵を地面に向かって叩き付け、衝撃波を発生させる。

POWER BOMB と同様の対人専用スキルのため、オーバーキ

ルの傾向が強く使い道に困る。

パワー

ボム

## ■ POWERBOMB

「スペシャル（人型の敵をグラブ中に空中で）」

敵を引っ掴み、地面に向かって急降下して地面に叩き付ける。範囲攻撃能力のある投擲技の一種。

~~~~~ 4個目と5個目の能力説明~~~~~  
そのままの意味です。

~~~~~ 特殊アイテム~~~~~

【大きさ】 ? ? ? ? ? □ i k 程の大きさ

【内容量】 ? ? ? ? ? 20粒

【オマケ機能】 ? ? ? ? ? 1ヶ月おきに、自動で補充される。ただし、20粒以上は増えない。

【入れ物】 ? ? ? ? ? □ i k の入れ物



## 第000・1話 その後（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

3回目がやっと書き終わりました。

ゞ(@ー@)ノ

? ? ? ? ? ? ? ? ? 何を言えいいか分かり

ませるので、始まります。

## 第000・1話 その後

Side 神

「あ、どうしよ座標少しずれちゃったけど大丈夫かな？」  
「??？」

「神様、よろしいでしょうか。」  
神様

「ん？どつたの秘書さん？」  
秘書

「はい、先程の人物に渡した内容で最初に叶えた能力に少々ながら不備がありました。」

こちらがその不備のあった詳しい内容です。」つ紙

神様

「はい」

秘書

「それと、転生した先の時間が決まっていなかったなので、原作突入の7年前しておきましたがよろしかったでしょうか？」

神様

「いゝよ。じゃあこの事あの人に送ってといてね。」

秘書

「わかりました。」ペコリ

こうして神様の心配事も無くなって(?)、いつもの仕事を始めました。

秘書さんは手紙を転送して、こちらにもいつものように仕事を始めました。

Side Out

Sideアレックス

気が付くと穴の中を落ちていた。

清々しい程の笑顔で送られて来たが、ほぼ垂直に落ちてるからメチャメチャ速い。そして最後に神様の口から聞いた、

神様

(「あ」)

が未だに気になっている。

そうしている内に、足下が少し明るくなってきた。俺は、恐る恐る下を見ると出口なのか綺麗な雲1つ無い青い空が見える。

アレックス

「はあ？　？　？　？　？　？　空？　？　？」

そこを抜けると遥か上空だった。

思考が一旦停止したのは言うまでもないし、しょうがないと思う。例えば言つと、『パラシュート無しでスカイダイビング』みたいな感じ。

アレックス

「くそおーーーーまだ落ちるのかよーーーー！」

少しの思考ですぐ出てきた言葉をだす。

アレックス

グライド  
「GLIDE！」

その瞬間、両手を広げる事によって滑空状態になり、より長時間滞空することが出来る技だ。

アレックス

「危ねえゝ？？？これでもまだましだな。だけど空を飛ぶ為の能力が使えなかったら間違いなく危険だったな？？？」

安心感に浸っていると、またスピード上がっていき斜め下に落ちていく。この技は『飛翔』ではなく『滑空』のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

だいぶ離れた所に落とされたらしく、いくつかの町や村が森の奥にチラチラ見えたが、どれがマグノリアなのか分からなかった。

けれど、自分が貰った能力の確認をしたいため、近場の森の湖の近くに降りる事にした。

湖に向かいながら、アレックスは「自然落下↓エアダッシュ↓グライド↓自然落下↓エアダッシュ↓グライド↓自然落下↓エアダッシュ↓グライド↓自然落下」をやること

で、

地上から約40m上空から地面に飛び降りた。この位の高さなら平気らしい。そして、アレックスは目の前の湖を覗いてみるとその姿は？　？　？　？　？　？

アレックス

「完璧にアレックス？　マーサーだな？　？　？　？　？　？  
少し幼い感じだけど。」

その姿は、『Prototype』にでてくる、アレックス・マーサーだった。しかし、なぜ自分が幼くなっているのだろうと思っていたらさきに、神様から貰った携帯電話の着信音が鳴った。

確認しようとポケットに手を入れながら近くの切り株に座ると、新着メールが2件届いていたので先に古い方を読んでもみると？　？　？　？　？　？

アレックス

「はあっ？」

～～内容～～

これを見てるって事は、空からのダイブは、無事に着いたって事だなね。

あとね、落とす場所と、時間がずれちゃってね、今原作よりも7年前になったんだ。ごめんね。

それと、能力の確認したら、色々と移せてないのが、あったらしい

から、詳しい事はメールが届くのを待ってね

by 神様より

アレックス

「？　？　？　？　？　？」

「神様はおっちょこちよいwww」ポチポチポチポチ  
「よしっ、保存完了！」

そんな感じで1つ目のメールは受け流し、もう1つのメールにはさつきよりも解りやすく書かれていたが、内容が酷かった。

アレックス

「oh　？　？　？　？」

～～内容～～

こんにちは、神様のサポートをする秘書です。単刀直入に言うと、最初に叶えた能力の一部が不具合により使用できません。

～以下の能力が完全に使用できません～

？　ベクトル操作による、自動反射能力

？　ベクトル操作による、自分の身体能力の向上

～以下の能力は条件付きで使用できます～

？　黒い羽の使用　　使用回数は1日5回が限度。使用時

間は10分。鍛えれば伸びますが時間と経験、感覚が必要。

？ ベクトル操作での反射能力                      自動では無いが反射はできる。

↓ 以下の能力は支障が無く使用ができます↓

？ 演算能力

？ 運動量・熱量・光・電気量 etc といった全てのベクトルを、触れただけで観測、変換する能力。

？ ベクトルの操作で周囲の感知能力

？ ベクトルの操作で風を操り暴風操作

？ 逆算能力

これらが、貴方に渡した能力におきた不具合と使える能力です。こちらも謝罪といった形で、何かしかなかったので5個目の内容を勝手に変えました。

『丈夫な身体』↓『とある魔術の禁書目録にでてる、聖人と同じ身体』

それと、特殊アイテムは1ヶ月おきに補充されますが、20個以上にはならないようにしてあります。使い方に気をつけて下さい

。では、よい第2の人生を楽しんで下さい。

秘書より

P S この文章は見終わると自動的に破壊されます。

俺は最後の文章を見て、慌てて携帯電話を投げ捨てる。

それと同時に、音を立てて携帯電話は原型をとどめることなく、壊れていき最後は潰れて無くなった。

アレックス

「『Prototype』の能力は大丈夫かな？さつき<sup>グライド</sup>GLIDEはできたけど？？？？？」

俺はそこで思考切り替えて、能力確認をする事にした。もし何かの手違いで『Prototype』の能力がアップグレードしないとだめならば、完全に死ぬ。というかやばい。  
俺は焦りながらも近くの木に向かって技をだした。

アレックス

「<sup>グランド</sup>GR<sup>スパイク</sup>OUNDSP<sup>ブレード</sup>RIKE！」ドンッ！ズガガガッ！バシュッ！

ザクザクザクザク！

「ジャンプしてからの<sup>エア</sup>BLADEAIR<sup>スライス</sup>SLICE！」ダンッ！ヒュン！ゴオオオオッ！ザンッ！

アレックスの出した技は地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能な能力だ。  
2発目に出した技は、空中でブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。下方向への追尾性能はかなり高い。

そのため、目の前に有った木は地面から出た棘によってボロボロの穴だらけになり縦に割れた。



力』と言う名の『狩り』を始める。  
勿論、決めゼリフは？　？　？　？　？

アレックス

「さア、スクラップの時間だ！」

Side Out    アレックス

## 第000・1話 その後（後書き）

いかがでしたか？

今回は戦闘シーンがありませんでしたが、技を出す時の擬音が微妙でした。（^ー^；）

そろそろクリスマスの時期ですが、風邪を引かないようにして下さい。（>人<）

それでは、皆さんまた次回！

b y天翔る堕天使より。

## 第000・2話 ギルドへの勧誘（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。  
なんと初の連続投稿！

勢いに乗っていると楽しいです。

ぐ（@ー@）ノ

では、どうぞ！

## 第000・2話 ギルドへの勧誘

俺がフェアリーテイルの世界に来てから2年がたった。現在は原作開始5年前となる。つまりナツがルーシーに会うまでが少しず近づいて来た。

ちなみに俺はライオン(?)の様な動物を捕食した後、湖の近くにあった荒れた町の中にログハウスを造って生活をしている。

大きさは1階建ての1LDKのバス、トイレ付きだ。

なんと、ここら辺の町はあの変な動物達が暴れて被害に有<sup>へ</sup>っていたらしい。しかもあの変な2匹がボスという始末だった。

アレックス

「だいぶ時間がたったなあ ? ? ? ? 能力も十分に使えるようになったしこの町も平和になったな ? ? ? ? ?  
んっ ?」

俺はこの2年間で、町から半径4〜5kmに生息していた危険な猛獣+別の意味で危険な猛獣を追っ払った。

建物は一部が破損している所も有ったが、町の人達に『猛獣を追っ払った』と話したら皆、泣いて喜んだ。

そして話が飛ぶか、霸王色の覇気は半径200mまでなら威圧ができるようになったが、まだまだ伸びそうだ。見聞色の覇気と武装色の覇気は最初から完璧に使えて、見聞色の覇気での『気配の感知』が2?まで観<sup>み</sup>えるようになった。

それに、ベクトル操作の感知能力を合わせると3?まで伸びるよう

になり、かなり鮮明に観<sup>み</sup>えるようになった。

そして今、その感知能力<sup>センサー</sup>には見覚えは無いが原作に出てたあのマスターと、紅い髪の女の子が俺の自宅に向かってやって来た。

アレックス

「やっと来たか？　？　？　待ちわびたよ。」

距離にして200mをきったところだ。ちよつとイタズラで、覇王色の覇気を軽く1回だけ当ててみる事にした。

＼Side Out　アレックス

＼Side　？　？　？

＼覇気を当てられる少し前＼

？　？　？　？　？　？　1

「この町にいるんですか、マスター？」　ワクワク！！  
？　？　？　？　？　？　2

「ああ、この先に建っているログハウスに住んでおるようじゃ  
？　？　？　気になるのか、エルザ？」

最初にマスターが？　？　？　？　いやマスター　？　マカロフは一緒に来たエルザという紅い髪の子と道案内をされながら少し話をしていた。

エルザ

「はい！なんといってもこの辺りの危険生物を、1人で全部倒したり山に返したりしたと聞きました。

かなりの腕の立つ人物に違い有りません！」ワクワク！！

マカロフ

「うむ。確かにこの辺りの危険生物はそれこそ『Sランク』の依頼ほど危険では無いんじやが『Aランク』の依頼にしては、ちと荷が重いからの。」

しかも、この辺りの危険生物をたった1人でとなるとかなりの魔導士じゃろう？　？　？　？　一体どんな奴なんじやい？」

マカロフは、道案内をしてくれている男性に聞いてみた。

男性

「最初、僕達はかなり変わった人だと思いましたよ。5年前にこの町にあの変な猛獣を1人で倒しただなんて誰も信じないから、僕を含めた皆が口を揃えて言いましたよ、『じゃあこの辺りの危険生物を全部退治してくれ！！』ってね。

そしたら、ものの5日で退治したんだからびつくりしましたよ。

ましてや急に、『俺は魔法が使えないから建物が直せません。だから皆で町を直しましう。』<sup>みんな</sup>だなんて言い出したんですよ。」

マカロフ&エルザ

「魔法が使えない？」

男性

「はい。皆が『どうやって倒したの？』って聞いたらあの人は、『威圧した』って言うから皆びっくりしましたよ。」

あつ、この道の突き当たりがアレックスさんの自宅です。」

そう言うと、男性が指を差した少し狭い一本道の先にまだ新しい感じの家があった。

男性

「では、自分はここで」ペコリ

マカロフ

「ああ。有りがと」スッ

エルザ

「有難うございました。」ペコリ

マカロフ&エルザ

「？　？　？　？　？」

エルザ

「マスター、魔法を使わずに『威圧』で倒したと聞くと何故か怖く感じるのですが。」

マカロフ

「うむ。どうやら気を引き締めて行くのかの。」

そういつて2人はアレックスの自宅に近づいた瞬間、先程の男性が言ったアレックスの『威圧』が2人に当たった。

マカロフ&エルザ

「ッーーーーー！」

エルザ

「マスター今のは？一体どこから？」

マカロフ

「落ち着くんじゃエルザ。多分だろうがこれが先程の男性が言っていた『威圧』じゃろう。」  
「とりあえず目当ての人物に会うに、行こうではないか。アレックス君にの。」  
「スタスタ

エルザ

「はい。」  
「スタスタ

Side Out マカロフ&エルザ

Side アレックス

アレックス

「だいぶ焦ってるけど、マカロフさんはどうって事なさそうだな。多分、勧誘だろうから行く支度でもするか？　？　？　？　？  
と言っても何も無いけどね。」

アレックスの自宅には娯楽の類が一切無いため、俗にいう『殺風景な家』ともいえる。

しばらくすると家のドアが開き、1人の老人『マスター？ マカロフ』と紅い髪の毛をした、『エルザ？ スカーレット』が入っ

て来た。

マカロフ

「初めまして、わしはフェアリーテイルのマスターをしている、マカロフじゃ。そしてこっちがエルザじゃ。」ペコリ

エルザ

「宜しく。」ペコリ

アレックス

「こちらこそ宜しくお願いします。マスター？マカロフそれにエルザさん。」スッ

（まさかここでエルザにも合うなんて思わなかったな。）

「申し遅れましたが、俺の名前はアレックス？マーサー。アレックスと呼んでください」

マカロフ

「アレックスか？？？おぬしはここで何をしてるんじゃ？」アレックス

「普通に生活してます？？？最近猛獣も出て来なくなり平和になりましたから。」

マカロフ

「ふむ？？？ここには獰猛なA級の怪物ばかりが住み着く森なんじゃったんだが？？？ここ最近でこの森に生息していた危険な猛獣がいなくなったんじゃ。」

「それで気になって来たんじゃが？？？？？お主の仕業かの？」

アレックス

「流石ですねマスター？マカロフ、確かに俺が退治しました。勿論聞いたと思いますが『魔法は使ってない』と言うのは事実です。」

と言うと、マカロフとエルザが驚く

マカロフ

「ふむ？　？　？　実力も申し分ない　？　？　？　なら大丈夫かの？　？　？　？　どうかの？」

エルザ

「私も賛成です、マスター。」

アレックス

「？　？　？　？　？　？」

マカロフ

「おぬし、わしのギルドに入らんかの？」

俺はこれを見ていたと言っていいほど、嬉しい申し出だ。

アレックス

「喜んで。」ニコッ

Side Out アレックス

## 第000・2話 ギルドへの勧誘（後書き）

いかがでしたか？

登場人物の口調に、違和感があればぜひコメント下さい。

では、また次回！

by天翔る堕天使より。

PS）アレックスはハーレムは基本的にはありません。一途な男なので？？？？ 12月21日までに『活動報告』へ詳しく書きます。

### 第000・3話 旅立ち、フェアリーテイルへ（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

今回はアレックスが、ギルドに入ってナツと力比べをする話です。

なんと、活動報告についてコメントが書き込まれました。ヽ(@

！@)ノ

ありがとうございました。

それでは、どうぞ！

### 第000・3話 旅立ち、フェアリーテイルへ

Side アレックス

アレックス

「じゃあ町の方はよろしくお願いします。もしまた猛獣が出たら、直ぐに駆けつけますから。」

「町の管理や治安も、頼みましたよ皆さん。」

アレックスは町の人達にこの町からでて『マグノリア』にあるギルドに入る事を町の長に伝え、町の人達にも話した。

勿論誰も止めなかった。何せ彼はこの町の恩人でもあったので、ここで、自由にさせてあげようという話しが前から出ていたのだ。

アレックス

「皆さん、行ってきます。」

こうしてアレックスは、マカロフとエルザが待っている駅に向かって行った。

Side Out アレックス

Side マカロフ&エルザ

マカロフ

「それにしても、あの青年はちと気になるの。エルザ、お主はどうじゃ？」

エルザ

「マスターもですか？実は私もなんです。何故かあの男からは『魔力』ではない『別の力』が強く感じられます。」

マカロフとエルザは駅のホームにアレックスが来るまでの暇潰しに、2人はアレックスについて話していた。

マカロフ

「うむ、ワシも彼の『力』が見たことがないから、どれ程の強さか知りたいの。」

エルザ

「・・・マスターも知らない『力』となると・・・一体なんでしょう・・・あつ、来ましたよ。」

そんな話をしていると、人混みの中ならアレックスが見えた。その後3人は列車に乗り、『マグノリア』へと向かっている。

勿論、さっきの2人が話していた内容は全部アレックスの耳に聞こえていたのは言うまでもない。

Side Out マカロフ&エルザ

Side ギルド内

マカロフ達が駅からおりて『マグノリア』にあるギルド、フェアリーテイルに向かっていとギルド内では………

???・・・1

「オイ、クソ炎やんのか、あぁん？」ゴゴゴゴゴ！！

???・・・2

「上等じゃねえか、氷野郎。かかって来い！！」ゴゴゴゴツ！！

???・・・3

「なんだあ？またグレイとナツが喧嘩してんのか……いつもなら、エルザが止めにはいるのに見当たらねえな。リサーナ、知らないか？」

リサーナ

「確か、今朝からマスターと一緒に『山のふもとにある町に用がある』っていったよミラ姉。」

ハッピー

「あいつ！！」

最初に喧嘩をしていた2人は言うまでも無く、『グレイ・フルバスター』と『ナツ・ドラゲニル』、相変わらず中の悪い2人組だ。つぎに『ミラジェーン』、エルザを気にしている……

ミラ

「なあゝんだ。てつきりどっかに隠れてるかと思ったぜ。あっはっはっはっ！」（笑）

「……そうでもなかった。彼女はエルザと仲が悪く、まさに『犬猿の仲』ともいえる程の、仲の悪さだった。

リサーナ

「もう、ミラ姉ったら。

あつ、ちょうど帰って来たよ。マスター、エルザおかえり」。あれ？マスター、後ろの人って誰？」

Side Out ギルド内

Side アレックス

アレックス

「ここがギルドですか、なかなかいい所ですねマスター・マカロフ。

「

マカロフ

「そうかい？ありがとな。それと呼び方は何でもいいんじゃないが、そ

の呼び方じゃと何か、よそよそしい感じが……」

アレックス

「申し訳ない、では『マスター』でいいですか？」

マカロフ

「うむ、お主はこれからワシらの家族じゃから好きに呼ぶがよい。」

リサーナ

「マスター、エルザ〴〵おかえり〴〵。あれ？マスター、後ろの人って誰？」

誰かがこちらに気がついたようだ。

アレックス

「こんにちは、お嬢さん。今日からこのギルドに入る事になった、アレックス・マーサーだ。」

『アレックス』と呼んでくれ。」

（この子がリサーナかな。まだエドラスには飛ばされてなかったんだな。）

リサーナ

「こんにちは、アレックスさん。」

ミラ

「宜しくな、アレックス。」

簡単に挨拶をしていると、マカロフの横にいたエルザに気がついたある2人は、さっきまで喧嘩をしていたのにビクビクしながら、肩を組んでエルザと話している。

グレイ

「よ、よおエルザ。き、今日も俺達は仲良しだぜえ。な、なあ。」  
ガクガク

ナツ

「あ、あい」ガタガタ

エルザ

「うむ、仲良しい事だか時には喧嘩して互いの悪い所を見つめるのもいいぞ。」

ナツ＆グレイ

「「お、俺達はそんな事（しないぜ。）（するわけねえだろ。）」「  
（苦笑）×2

エルザとの話が終わると、エルザは奥の部屋に向かって行く。それを確認した2人は、安心してその場にしゃがみ込んだ。しばらくして、ナツが俺に気づいたらしく『お前誰だ？』、と言っている感じがした。

よく見ると、周りの人が俺に注目している。

マカロフ

「彼はワシらが用のあつた町にいた、腕のあるフリーの魔導士じゃ。名前は『アレックス・マーサー』。」

そう言うと、ナツは目を輝かせたりグレイは興味を持ったり、ミラに至っては闘志をむき出しにしていた。マカロフは続けて、

マカロフ

「近頃、少し離れた町に現れる猛獣を1人で倒したらしいからの。皆も最近ギルドでの依頼で、この辺りの猛獣の討伐が少なくなったじゃろう?」

「それは、ここにいる彼のおかげなのじゃよ。」

一同

「「「「「「「「「ええええええつ?」「」「」「」「」

ナツ

「そうなのかじっちゃん!よし、お前。俺と勝負しろっ!」

そういう事を言うと、ナツは笑顔で右の拳を俺に向けて言ってきた。勿論右手には、炎を纏っている状態だ。こいつはかなりのバトルジャンキーらしい。というかマカロフ、余分なところは言っな。

アレックス

「少しは落ち着け。俺とお前は、初対面しよたいめんだろ?そんな人に勝負を挑むのはどうかと思うのだが?」

俺は持てる限りの常識をナツにぶつけて理解してもらいたかったのだが、

ナツ

「いいじゃねえか、ちよつとくらい。早く外に行こうぜ!」

どうやら無駄らしくナツに引つ張られながら表にでた。マカロフも小声で、

マカロフ

「一回でいいんじゃない。軽くでいいから、やってくれんかのう？」ボソソ

マカロフが苦虫を潰した顔をしていると、周りからは「マスターが認めるほど強いらしいぞ。」とか「どれ程の実力を持っているんだ？」と、ギャラリーまで増える始末。

・・・つまり、『闘わないとマズイ状況』という事らしい。

Side Out ギルド内

Side アレックス

マカロフ

「それでは2人共、準備はよいかの？」  
ナツ

「早く始めようぜ！！」

審判はマカロフがやるらしい。俺が「手加減してやる。」ってのをナツに持ち掛けたら、「いらねえよそんなもん。」と言われた。

そして、目の前では目をキラキラと輝かせたナツがいる。……  
なんでこんなにつれしそにできるんだ？

周りはギルドのメンバーに囲まれているので直ぐに降参出来ない。

アレックス

「しかたない……」

そんな事をぼやいてから、俺は観念して能力を使う事にした。直ぐに『霸王色の覇気』で相手を『威圧』してもいいが、それだと芸が無いからやめておこう。

アレックス

「マスター」ボソッ

審判のマカロフヘナツに聞こえない程の小声で話かける。

マカロフ

「ん？ なんじゃ？」ボソッ

アレックス

「ナツにはどの程の力で相手をすればいいでしょう。」ボソボソ  
マカロフ

「ふむ、適当にやればいいのではないか？こう、軽いトレーニング的な感じかろう？」

あ、殺すのは勿論の事じゃが、なしじゃぞ」ボソボソ

まともな情報は得られなかった。というよりさっきまで家族って  
言ってたのに、その家族に対して殺し以外はオツケーなのか？と、  
俺が驚愕していると、

ナツ

「はやくしろよっ！」

対戦相手であるナツが、苛立っているのがわかる位の声を出して  
きた。

アレックス

「分かったからちょっと黙ってる。」

俺はマッスルマスMUSCLE MASSを装備した。  
ちなみにこの能力は、素手状態の攻撃ダメージを強化。戦闘中に発  
揮できる機動性能は全能力中随一。

マカロフ

「うんっ？それがお主の能力かの？」

アレックス

「ええ。相手が相手なので、ある程度本気を出さないと色々面倒で  
しょう。」

俺は苦笑して答えるが、

アレックス

「でも本当は、手加減するのが苦手なんですよ。」 クスクス  
マカロフ

「・・・・・・・・。」

俺の言葉に黙るマカロフ。そのマカロフを尻目に、俺は戦闘体制にはいりナツに話しかける。

アレックス

「ナツ、と言ったな？先に謝っておこう。」

ナツ

「ん？何をだ？」

声をかける俺。ナツは思案顔で首を捻っている。でもこれは先に言っておかなくてはならない。

アレックス

「手加減は、なるべくする。だから・・・・・・・・死ぬなよ？」

アーマードフォーム

その瞬間、俺はARMORED FORMを装着した。周りから驚嘆の声がする。ナツも驚いてるようだが、俺は気にせずナツに話す。

アレックス

「さあ、始めようか？」

準備は万端。俺が両腕を広げながら話かけると、ナツも俺の声で我にかえったのか構えなおす。

マカロフ

「始めっ！！」

マカロフの合図とともに、ナツは大きく息を吸い込んでいる。この技は、確か広範囲にいる敵に対して攻撃するはずだ。  
ナツは周りに関係無く技を出すらしい。

ナツ

「火竜ウの咆哮オオ！！」

避けることもできるが、避けたら後ろにいる皆に当る。俺はしょうがなく手を前に突き出して、

マカロフ

「っ！？アレックスッ！！」

ナツの炎が直撃した。マカロフの慌てた声が聞こえるが、俺は『武装色の覇気』で身体表面を覆っているから少し温かい位だ。確かに、普通に見たら自殺行為だ。

ナツの技の衝撃で、俺の周りに砂塵が巻き上がった。

ナツ

「よし、俺の勝ちだっ！」「ブイ！

ナツは勝ちを確信しているようだ。周りからも「なんだ、弱いじゃないねえか。」との声が聞こえる。

アレックス

「俺も随分なめられたもんだな……………」

ナツ

「なっ！？」

俺がつぶやくと同時に、砂埃が晴れていく。そこには無傷でいる俺がいる。

アレックス

「解析終了…………ナツ、お前の炎はもう効かない。いや、俺にはもう意味が無い。」

そして俺は先程よりも強く拳を握りながら、

アレックス

「じゃあ……、次はこっちの番だ……なっ!!」

そう言ったと同時に、ナツの懷に飛び込む。もう反撃の隙は与えない。

ナツ

「っ!？」

ナツがそれに気づき、身構えるがもう遅かった。

ナツ

「うわっ!？」

俺はナツの足払い、身体を宙に浮かせた。そしてナツの左肩を押さえて地面に仰向けにする。

ドゴンッ!

こぶしを叩き付けた。先程よりも多い砂埃が宙に舞い上がる。

エルザ



亀裂の入った地面と共に、3つの穴が見えたからだ……

マカロフ

「そこまでっ！ 勝者、アレックス！」

そこに、マカロフの試合終了の合図がかかる。

アレックス

「ん？」

勝負が終わったのに静かだ。辺りを見渡すと、皆口を空けてこっちをみている。

まさかとは思うが、やりすぎたかな？

俺がそう思っていると、急に周りから、

一  
同

「『おっ！』」

L

アレックス

「つ！？」

皆の叫びが響き渡った。



## 第000・3話 旅立ち〜フェアリーテイルへ（後書き）

いかがでしょうか？

今回はここで終わりましたが、次回はグレイ達がアレックスと勝負をします。

〜活動報告内容の途中結果〜

ミラジエーン・・・2票+1票

第000・4話 礼儀知らずに容赦なし（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

今回は、色々な意味で大変でした。

この話から、キャラクターの視点を書き始めましたが、キャラクターの口調がなかなかうまくいきません。  
ご意見の方、気軽に書き込んで下さい。

では、どうぞ！

## 第000・4話 礼儀知らずに容赦なし

Side アレックス

ギルド内では、先程のナツとの戦いでかなり興奮している4人＋1人がさつきから俺に、『（もう1回）（俺と）（私と）戦え！』と言ってきた。

ちなみに、その人物は先程負けた

ほのうドラゴンスレイヤー  
炎の滅竜魔導士『ナツ』、

こおりぞうけい まどうし  
氷の造形魔導士『グレイ』、

かみなりドラゴンスレイヤー

雷の滅竜魔導士『ラクサス』、

ざ・ナイト

騎士を使う『エルザ』、

ディクオーバー

吸収・サタンソウルを使う『ミラ』だ。

アレックス

「条件付きで良いなら相手をする。良いか？」

ナツ

「おう！早く言え！」

グレイ

「ナツ、お前は負けたんだから諦める。」

ラクサス

「ガキ共の相手はしないで、俺と戦え！！」

エルザ

「少して良いから手合わせを頼む。」

ミラ

「アレックス早くしろ。」

俺はひとまず、こいつ等に『礼儀』をいち早く叩き込みたい。何<sup>ど</sup>処の世界に年上に対してタメ口で話す奴がいるんだ。

エルザを見習って欲しいもんだな。個人的にはミラがタイプなんだが……。

アレックス

「まず最初に……ナツ、お前はさっき負けたばかりだから諦めろ。」

次に裸の君、せめてズボンを履け。パンツだけはさすがにマズイ。それとヘッドホンの君、お前もまだ『ガキ』の部類だ。調子に乗るなよ？

エルザ、1人を相手にしたら休憩させてくれ。それでもいいなら相手をする。

最後にミラ、一応俺は年上だ。せめて敬語で頼め。それに女の子なんだから、その言葉使いはやめなさい。」

俺は言いたかった事を、全て言った。全員の名前は知っていたがあえて言わない。なんでかって？こいつ等には、一から『礼儀』を叩き込みたいからだよ。

そんな事を言っていると、皆が口々に喋り出した。

ナツ

「次は勝つ！だから勝負だ！」ニッ！

グレイ

「だあーっ！しまった！」バタバタ

ラクサス

「ふざけんじゃねえぞ！」バチバチバチッ

エルザ

「ありがとう、アレックス。」ニコッ

ミラ

「わ、わかった。次からは気をつける。」オドオド

アレックス

「よろしい。ナツとヘッドホンの君は……ちょっと黙ってる。」ギンッ！

俺は、覇王色の覇気をナツとラクサスに気絶させる程度に当てた。ナツはすぐに倒れたが、ラクサスは少し耐えた様だ。だが、こちらも倒れた。

アレックス

「これで礼儀知らずとうるさい奴はいなくなっただな……んっ？ どうした。」

それを見ていた3人は若干……いや、かなり驚いている。周りにいた人達も「何をしたんだ。」や「ラクサスは負けたのか？」と言っている。

そんな中、1人の人物が口を開いた。

マカロフ

「それはワシ等にしたのや、猛獣を倒したのと同じ『威<sup>い</sup>圧<sup>あつ</sup>』なのか、アレックス？」

「……はい、しかしマスター達にしたのは1割だとすると、2人を気絶させたり猛獣にしたのは2割程の威圧ですので、ご心配なく。」ニコッ

「さあ、話とはぶが俺は暇だが、時間が無い。誰から始めるか決めてくれ。決めてないなら上着を着てない君から始めよう。」

グレイ

「お、おう。よろしく頼むぜ。」

そして俺らは、ナツとラクサスを残して、表へと向かう。

勝負の順番は、

- 1・グレイ・フルバスター
- 2・エルザ・スカーレット
- 3・ミラジーン・ストラウス

Side Out アレックス

Side 3人

グレイ

（ラクサスが一瞬でやられちゃった……勝てるのかな？）

エルザ

（なんだかミラの顔が赤くなってるな……まさかな。それよりもどうやって、アレックスを倒すかな。）

ミラ

（何をしゃがったんだこいつは？急にナツとラクサスを気絶させやがった。しかも、“礼儀が知らないから”って理由でだと？）

（だいぶ本気でかからないとまずいな・・・あれっ？そういえば、アレックスと始めて会った時ってタメ口だったよな・・・なんで怒らなかったんだ？）

（それに、久し振りに“女の子なんだから”、だなんて言われた／＼／＼）

それぞれが色々な事を考えている。

＼ Side Out 3人

＼ Side アレックス

アレックス

「準備はいいか、グレイ。時間が欲しいなら幾らでもやるぞ。まあ、あげるつもりは無いけどな。」

グレイ

「じゃあ聞くなよ！期待しちまったじゃねえか！」

そんな事をしていると、マカロフが審判をやりだした。何だかんだいって、俺もマカロフも割と楽しんでいる。

そしていつもの事だが、ギルド内にいたほぼ全員がギャラリーと

して集まってきた。

マカロフ

「それでは、始め！」

グレイ

「氷造形・アイスメイク 槍騎兵・ランス 氷造形・アイスメイク 大槌兵・ハンマー」

マカロフの合図と共に、グレイは槍騎兵と大槌兵を繰り出した。  
おそらくだが、槍騎兵でその場に足止めさせているうちに、大槌兵  
で俺にとどめを刺すつもりだろう。  
しかし、実際には自分の得意な技をアレックスに1回でもいいか  
ら当てたいだけらしい。

アレックス

「氷の槍とハンマーか……組み合わせは素晴らしい……だが、まあまあだな。」

グレイ

「なにっ？」

アレックス

「ブレイズ BLADES & シールド SHIELD！」

Side Out アレックス

Side グレイ

マカロフ

「それでは、始め！」

グレイ

「氷造形・・・アイスメイク 槍騎兵！ランス 氷造形・・・アイスメイク 大槌兵！ハンマー」

グレイは、この攻撃を最も得意としている。ランス 槍騎兵はかなりのスピードがある為、先制攻撃に向いている。ハンマー 大槌兵に至っては、先程の槍騎兵よりはスピードは劣るが、威力は申し分ない為追撃として出した。

グレイ

（決まった！）

アレックス

「だが、まあまあだな。」

グレイ

「なにっ？」

アレックス

「ブレイズ BLADES & シールド SHIELD！」

Side Out グレイ

Side アレックス



ギルドの中で倒れていたラクサスが目を覚ました。

Side Out アレックス

Side 3人

グレイ

（何にも見えなかった・・・気づいたら横にいて、喉に突きつけられてた。）

エルザ

（やはり強いな。今回は諦めて、ミラと変わってもらおうとするか。

）「ミラ、順番が変わってくれないか。私は辞退するから、頼む。」

ボソボソ

ミラ

「はあっ？・・・こ、今回だからな！／／」ボソボソ

エルザ

「すまない、恩にきる。」ボソッ

（やはり顔が赤いな・・・もしかして・・・な？）

ミラ

（ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！何だか、ドキドキしてきた！！なんで！？落ち着け私、たかが勝負するだけだろ！？）

カアーツ

それぞれが特集な思いをしたりしている。

Side Out 3人

Sideアレックス

アレックス

「なかなか面白い技の組み合わせだったぞ、グレイ。だがやるなら槍騎兵をもっと早く打ち出して敵を攪乱させてから、大槌兵を相手から見えない位置から当てる事だ。」

「まあ弱い相手とか不意打ちなら、かなり強力なコンボだ。俺でもギリギリで反応できたから、危なかったよ。」

グレイ

「そ、そうなのか。（あの動きは絶対に、強い奴の動きだった。一つ一つに無駄がなかったからな。）」

アレックス

「ああ、後は攻撃後の動きに気をつける。どんなに強い技で『結果』が良くても、技を出すまでの『過程』も大事だからな。」

俺はグレイに簡単なアドバイスをしていると、エルザが俺に近づいて“今回は辞めておく”と言った。つまり次に勝負するのはミラだ。

………なんだか物凄く顔が赤いが、気のせいだろうか。

アレックス

「ミラ、始められるか？それともお前も、エルザみたいに辞めておくか？顔がだいぶ赤いが。」

ミラ

「だっ、大丈夫だっ！／＼／」

マカロフ

「ふっ。・・・では両者準備は良いかの？」

アレックス&ミラ

「「ああ、いいぞ」」

マカロフ

「それでは、始め！」

マカロフの合図と共に、俺は走りながらマッスルマスMUSCLE MASSを装着した。ミラも、サタンソウルになり両者の『殴り合い』が始まる。

『殴り合い』は始めてだから、見聞色の覇気を使ってミラの攻撃を『探知』し始めたら、ミラの後ろからさっきまで倒れていたラクスが、らいりゅうほうてんげき雷竜奉天劇を繰り出した。

流石にマズイと思い、俺は一旦ミラの右拳を顔の左に受け流し、ミラを左手俺の懷に引き寄せる。そしてミラの後ろから来た攻撃に対して、右腕をシールドSHIELDにして反射を使った。

反射だけでも良かったが、反射だけで確実に返せるか分からなかったから、保険として出した。  
アクセラレータ

一方通行さんの反射能力、久しぶりに使ったような気がする。

アレックス

「解析終了・・・これで万が一でも安心だな。ミラ、大丈夫か？」

ミラ

「¥（／／／／／）／」プシューッ  
アレックス

「気絶してる……のかこれは。なんだか幸せそうだが。」

＼Side Out アレックス

＼Side ミラ

マカロフ

「それでは、始め！」

私は闇雲に拳をアレックスに突きつけた筈だったが、アレックスはそれを簡単に避けて、私を抱き寄せた。

ミラ

（えっ？なに？アレックスに抱き締められてる？えっ？どうゆうこと？って言うか私アレックスの首に腕まわしてる？）

（うわっ？アレックスの息が首につ？ヤバイヤバイヤバイ？顔が？アレックス？力を込めるな？アレックスの胸に顔が？くぁw  
se dr f t g y ふじこ 1 p ? ）

（しあわせだー！！！！¥（／／／／／）／）プシュー

Side Out

第000・4話 礼儀知らずに容赦なし（後書き）

いかがでしょう？

頑張って続きを書いていきたいですが、軽いスランプです。（、

ん、y・

でも、諦めません。

次回は、ラクサスへのお仕置き編です。  
では、また会う日まで。

b y天翔る堕天使より。

## 第000・5話 一方的な勝負（前書き）

どうも、天翔る堕天使です。

何とか書けたけど、あまりの駄文にスランプ気味な俺（ ;  
、  
）

原作まで後少しなのでテンション上げて頑張ります。

♪ ———— ○ ———— ） ○ ———— ♪

では、どうぞ！

## 第000・5話 一方的な勝負

Side アレックス

アレックス

「ヘッドホン君、これは一体全体どういっつもりなのかな？」ギロリッ！

ラクサス

「ーッ？」ゾクッ！

マカロフ

「ーッ？」ゾクッ！

俺は急に攻撃してきたラクサスに対して『その場から動くな！』の意味を込めた威圧をしてから、マカロフには『皆を近づけるな』の意味を込めた威圧をしたのは、この方が早く伝わるからだ。

2人は理解したか判らないが、ラクサスはその場から動かずにこっちを見ている。マカロフも察してくれたのか、俺に向かって1度頷き俺とラクサスから、皆を離れさせた。

そんな中、ある2人にマカロフが俺に指を差しながら話していると、2人が駆け足で向かってきた。エルフマンとリサーナだった。恐らくマカロフが頼んだのだろう。

エルフマン

「姉ちゃん！アレックスさん、姉ちゃんは大丈夫ですか！？」

リサーナ

「エルフ兄ちゃん、アレックスさんが守ってくれてたから大丈夫

だよ。」

アレックス

「ああ、大丈夫だ気絶してるだけなんだが・・・やけに顔が赤いんだ。勝負の前からだったから、もしかしたら風邪なのかもしれない。看病は手伝うから、後は任せてもいいか？」

エルフマン

「はっ、はい!!」(凄く赤い!早く寝かさなきゃ!!)

リサーナ

「わかりました。」(気絶してる割になんだが顔がニヤついてるんだよね。)

ミラ

「(ノノノノ)」プシュー

俺は気絶してるミラをエルフマンに任して、リサーナにはすっかり忘れていた『特殊アイテム』を1粒渡して、起きたら飲むように伝えた。

そして俺は怒りが爆発寸前だったが、今を見て反省していれば少し能力を抑えてやろう。と、いった願いを思いながらラクサスにむかって、

アレックス

「さあヘッドホン君、愉快的オブジェになる準備はできてるかな?それともお前は、スクラップにされたいか?」ゴゴゴゴゴゴ!!

Side Out アレックス

Side ラクサス

俺は確かに攻撃したはずだった。俺の技でもかなり強力な、らいりゅう雷竜うほうてんげき奉天劇を繰り出してミラと一緒に倒してやったはずだ。  
それなのにあいつは簡単に防いだだけでなくて、らいりゅう雷竜奉天劇を俺にそのまま返しやがった。

ラクサス

「どうゆう事だ。」

アレックス

「ヘッドホン君、これは一体全体どういっつもりなのかな？」ギ  
ロリッ！

ラクサス

「ーッ？」ゾクッ！

マカロフ

「ーッ？」ゾクッ！

あいつは今、何をしやがった？俺が勝負を挑んで気絶した時よりも、かなりヤバイ感じがしやがる。『少しでも動けば貴様の命が無  
いと思え。』とでも言ってるのか？

だが、俺は最強だ！さっきはきつと、まぐれに決まっているはずだ。そうに決まっている！俺に勝てる奴は、このギルドにはいないんだからな。

アレックス

「さあヘッドホン君、愉快的オブジェになる準備はできてるかな？それともお前は、スクラップにされたいか？」ゴゴゴゴゴゴ！！

Side Out ラクサス

Side アレックス

アレックス

（マカロフが周りの人を遠ざけてくれて助かった……これで心置きなく能力が使える。）

「ヘッドホン君、自己紹介でもしようではないか。俺の名前は、『アレックス・マーサー』。好きに呼んでくれ。君の名前は？」ラクサス

「黙ってる、化物！自己紹介？そんなもん、どうだっていい！このギルドで最強の俺と戦え！」アレックス

「……成る程、『原型が留めなくなるまでこの俺を叩いてくれ。』だな、任せておけラクサス。それと俺の異名は『化物』<sup>モンスター</sup>だから、褒め言葉ありがとう。」

俺はラクサスの言葉を自動変換、もしくは自己解釈をした俺は手加減する気はもう微塵も無い。

俺はMUSCLE MASSを装着して、武装色の覇気をMAXま

で身に纏わせて構える。

アーマードフォーム

ARMORED FORMも個人的に好きだから装着して、黒い羽も出すがこれは自分の腕に巻き付く感じで纏わせる。

こっちの世界に来て興味本位でやってみたら、時間は掛かったが上手くできた。時間としては30分間使用ができる。回数は20回程だが時々増減する。

アレックス

「実は俺も最凶だから気が合うな。」ニヤリ

ラクサス

「これでも喰らつとけ！鳴り響くは招雷の轟き、天より落ちて灰燼と化せ！レイジングボルト！！」バリバリバリッ！

空中から巨大な雷が俺の頭上目掛けて降ってきた。しかし俺はそれを避けて右拳で打ち消した。

実際は先程の攻撃で演算をしていたから、ラクサスの雷を空気中に小さく分散させているだけであり、そんな強く殴ってはいない。

アレックス

「それで？何故いきなりミラに攻撃したんだ。運が悪ければ死んでしまっていたかもしれないぞ。」

ラクサス

「うるせえ！大体お前が俺の事を『ガキ』扱いしたからだろ！それにあいつは弱い！なら死んでもかまわん！ハアーーッ！」

そう言いながらラクサスは雷を纏って俺に突っ込んできた。そん

なラクサスを俺は右拳で鳩尾を殴った。

ラクサス

「がはっ！？」

突っ込んできたラクサスはその場で倒れそうになるが、俺は襟を掴んで無理矢理立たせる。苦しうだが構わない。

そのまま俺はアップパーカートをラクサスにかましてからSPスバE DRIVERをやった。これは両手を振りかぶって、対象を地面に叩き付ける技。アップパーカートの後に浮かんでいる敵にしか使えない。

そして地面に叩きつけて倒れているラクサスにGROUND SHグラウンドシャーATTERもかました。これは、地面を思いっきりブツ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす技。

アレックス

「これで、フィニッシュだ。FLYING KICK！& FLIP KICKフライングキック LAUNCHER！ランチャー」

FLYING KICKは、ジャンプしてから相手に右足で蹴る技。フライングキック  
FLIP KICKフリップ LAUNCHERはFLYING KICKがヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げることで、追加ダメージを与え軽量の相手を吹き飛ばす。

ラクサス

「がはあああ！」ズザーーーッ！

ラクサスは、マカロフの近くまで蹴り飛ばされ気絶している。それをみたマカロフ、はラクサスに近づき頷いた。

マカロフ

「うむ。ここまで！勝者、アレックス！」

マスターが左手を挙げ勝利者宣言をすると同時に周りからは、

マカロ

「すげえぞ！あのラクサスを一方的に倒しやがった！」

ワカバ

「嘘だろ！？あのラクサスが新人に負けたのかよ！？」

ナツ

「アレックス、もう1回俺と勝負しろー！」

マカロ&ワカバ

「やめとけナツ、あのラクサスでさえ負けたんだ。しかもお前は負けたばかりだろ？」

ナツ

「やってみなきゃわかんねーだろー！なあ、ハッピー？ハッピー」

「あいっ！」

周りが少しずつだが騒がしくなってきた。恐らくだが、これが普

段のフェアリーテイルだろう。だから仕方が無いんだろうな。そう思っていると、息を荒げながらゆっくり立ち上がるラクサス。

ラクサス

「はあはあ・・・次、戦うときは必ず勝つ！はあはあ・・・覚えておけ！俺が最強だ！」ヨロヨロ

アレックス

「構わん。俺はいつでも挑戦を受ける。だが今はこれを噛み砕いて傷を治しとけ。直ぐに治るはずだ。」つ薬

ラクサス

「クソつたれが！」パシッ！ガリッ！

薬のおかげか、立ちあがるのが大変そうなラクサスだったが、直ぐに立ち上がる事ができたラクサスは、ギルドの中へゆっくり入っていた。

アレックス

「ラクサス、この世界には死んでもいい奴なんていない。ミラもその1人だ。」

ラクサス

「ふんっ。お前は先生か。」

俺は肩を貸しながらラクサスを仮眠室へ運んで寝かせた。ミラは別の部屋で寝ているらしい。顔を出そうとしたが、俺は他のギルドメンバーに背中を押されながら、ギルドの方に言ってしまった。

エルフマンとリサーナがいたので話聞くと、どうやら俺の渡した

薬を飲んだらまた赤くなって寝たと言っていたが、熱は無かったみたいだ。この楽しい宴会が終わり次第、顔を出そうと思っている

Side Out アレックス

第000・5話 一方的な勝負（後書き）

いかがでしょう？

次回はミラにお見舞いに行く話です。なかなか上手く出来ないの  
で、時間は掛かります。

ではまた次回！

by天翔る堕天使より。

第000・6話 ミラの元へ行くと、アクシデント発生。(前書き)

どうも、天翔る堕天使です。

今年のクリスマスは家族と過ごしました。

来年こそは・・・と、考えていますがまず無理でしょう。(y・D)

今回はかなり無理矢理感がありますので、暖かい目で見てください。

第000・6話 ミラの元へ行くと、アクシデント発生。

Side アレックス

夜中

俺は、皆が酒を飲みまくって酔い潰れている奴や、机に突っ伏している寝てる奴、床に寝ている奴を一カ所に集めて毛布をかけた。一通りが終わった所でミラのいる病室へと向かった。ミラの病室は、ラクサスよりも奥の部屋だとリサーナから聞いておいた。

俺は部屋の扉を開けて中に入った。ミラは気がついたのか、少しだけ動いている。

アレックス

「ミラ、体は大丈夫か？」

ミラ

「んー誰？エルフマン？それともリサーナ？」モゾモゾ

アレックス

「アレックスだ。少し良いか？」

ミラ

「ア、アレッーッ！／＼／」ガバッ

アレックス

「シーーッ。声が大きい。」

俺がミラの口に手を当てて大きな声をだすのを塞ぐと、窓からの

月の光でミラの顔が赤くなっているのが分かる。

俺は取り敢えずミラに落ち着くように説得したが、最初はなかなか落ち着いてくれず興奮していた。

アレックス

「体の具合はもう大丈夫か？もしかだ辛いようなら出直してくるが？」ナデナデ

ミラ

「だ、大丈夫だ！お前の薬を飲んだら直ぐに治ったぞ／＼あ、ありがとう／＼」カアアツ

アレックス

「そうか。お前が無事で良かった・・・だいぶ顔が赤くなってるが本当に大丈夫なのか？」スツ、ピトツ

俺がミラの頭を撫でると、ミラの顔が赤くなってきた。そこで俺は、両手でミラの顔を支えて俺のオデコにあてた。確かに熱は無いようだが少し熱い気がする。

アレックス

「今は無理しないでゆっくり寝ている。まだ治ってないようだから・・・大丈夫か？」

ミラ

「¥（／／／／／）プシュー

俺は取り敢えず、赤くなってしまったミラをベットに戻しておいた。俺は不意に窓の外に目を向けると、そこには神様と綺麗な人が

浮かんでいる……なんで？

神様は俺に向かって手招きをしていたのでギルドの入口から出て行き、神様の方へ向かった。

アレックス

「何であんたがココに居るんだよ。さっきのが人目についたら、流石にマズインじゃないか？」

神様

「大丈夫だよ。僕達の周りには、結界みたいな、特殊なものを張り巡らしてるから、誰にも見えないよ。」

秘書

「神様、今はそんな事よりもこの男に大事な用件が有るのではないのですか？」

アレックス

「大事な用件？一体なんですか神様？」

俺は全く……いや、恐らくだがまたこの神様おしひびきが何かしたと考えた。何せ俺を『うつかり死なせちゃいました。』みたいな事を言ったから、また『うつかりしちやった』だろう。

神様

「じ、実は僕もよく分からないから、後は秘書さんに聞いてね。」ヒュンツ！

アレックス

「……………逃げたな。まあ、当たり前か。それで？用件とは何ですか。」

秘書

「実は、カクカクシカジカ。」

アレックス

「まるまるうまつま……マジですか。」

簡単に説明をすると、神様は俺に渡した能力を紙に書いて机の上においていたら、3個目の能力を神様が消してしまったらしい……  
・なんで？

一応神様も悪いと思ったらしく、『埋め合わせる為の能力』+『新しく付け足す能力2個』でチャラにしよう。との事でした。

アレックス

「ならまた同じ能力を選べばいいのでは？」

秘書

「残念ながらそれはできません。他の転生者に試してみましたが、その能力本来の実力が100%だとすると、10%も発揮できませんでした。それでもよければ構いませんが？」

アレックス

「遠慮しておきます。」

どうやらマジでヤバイ。あの3個目の能力は『戦闘にはもってこい』程の力だったのでへこんでいる。だが俺は『Prototype』の、アレックス・マーサーの全能力MAX状態』並に使える、能力を思い出した。

アレックス

「まず最初に消えた1個目の能力は、ワンピースに出てくるCP

9が使用できる六式全てが使用可能。

秘書

「かしこまりました。では後の『新しい能力』の方をお願いします。」カキカキ

アレックス

「1個目は複数の悪魔の実が使用可能。動物系悪魔の実「ネコネコの実」レオバルド モデル”豹”」動物系悪魔の実「ウシウシの実」ソオン モデル”麒麟”」動物系悪魔の実「イヌイヌの実」ソオン モデル”狼”」超人系悪魔の実「ドアドアの実」の能力で。

2個目は、魔法剣の使用が可能。ついでにエルザみたいに服も変えれると嬉しい。」

秘書

「分かりました。しかし悪魔の実の能力の使用中は一方通行のベクトル操作能力は使用できません。それと、レオバルド モデル”豹”とウルフ モデル”麒麟”とソオン モデル”狼”の使用中は『ドアドア』は使用できません。」カキカキアレックス

「わかりました。」

俺の目の前にいる秘書さんは一通り書き終わったのか、こちらを見てきた。実に綺麗な人だ。例えるなら『大和撫子』+『エロカッコイイ』みたいな感じ。

話は飛んで、また神様みたいに『ミスをしました。』何て有りませんように。

秘書

「能力は完璧に渡しておきましたので安心して下さい。それと見た目をワンピースに出てくる『カク』に変えておきました。あと、

この世界に『前の貴方』を知っている人物を『今の貴方』にインプットしておきました。」ニコッ  
カク

「あ、ああ。すまないの。」

秘書

「詳しい事は次回の投稿で報告します。」

カク

「メタ発言は禁止じゃぞ。」

ワシがお礼を言い終わると同時に秘書さんは、ワシの前から消え去った。取り敢えずミラの元へ行き、ベットの横に椅子を置いて『形だけの看病』をしていた。

（翌朝）

ワシは目が覚めると、自分に毛布が掛けられていることに気が付いた。窓の外を見るとだいふ日が上りはじめている。

ギルドの方は、だいふ騒がしくなっていたので顔を出そうと椅子から立ち上がると、扉が開いて2人が入って来た。

エルフマン

「あ、おはようございます、カクさん。朝まで姉ちゃんの看病をしてくれて有難うございます。」ペコリ

リサーナ

「カク、おはよう。ミラ姉の看病ありがとね。」ニコッ  
カク

「ああ、おはよう。ミラの具合はどうじゃ？」

リサーナ

「『もう大丈夫』ってミラ姉が言ってたよ。」

ワシは『そうか。』と言ってからエルフマンとリサーナを連れてギルドの方へと向かって行つた。どうやら誰も俺が変わつた事に気づいていないみたいだ。特に鼻が。

そこでワシは、喧嘩していたナツと 그레이 を止めたエルザが、今度はミラと喧嘩をし始めたのを見た。

エルザがこつちに気が付いてミラに内緒話をしていると、次第にミラの顔が赤くなっていった。そして、ミラが急に走り出したのを見ていた。

Side Out アレックス改めてカク

Side エルザ

エルザ

「んっ？またナツと 그레이 が喧嘩をいっているのか。懲りない奴らですね。」

マカロフ

「まったくじゃのう。エルザ、すまんがあの人2人の喧嘩を止めてくれんか？依頼が終わったばかりで悪いんじゃないが。」ポリポリエルザ

「わかりました。」スッ

ナツ

「おい、グレイ。邪魔なんだよどけ。」ギロツ  
グレイ

「うるせえな、おめえがどけばいいだろうが、ああ!？」ギロツ  
ゴツンッ！ゴツンッ！

そんな2人の喧嘩をエルザは死角になっている所から殴りつけて  
無理矢理だが黙らせた。

ナツ&グレイ

「~~~~ッ！」ジタバタジタバタ！

エルザ

「お前達はまた喧嘩をしていたな。どうしてそんなに仲が悪いん  
だ？」

グレイ

「な、何を言ってるんだ？お、俺達はいつでも仲良しだぜ？な、  
なあ。」ガタガタ

ナツ

「も、もちろんだぜ。」プルプル

ナツとグレイとたわいも無い会話をしていると後ろからあいつの  
声が聞こえた。

ミラ

「よお、エルザ。朝から居ないもんだからてつきり隠れてるかと思  
っちゃったぜ。」

エルザ

「ミラ、私はてっきりまだベットで寝込んで、カクに看病して貰って甘えてるかとおもったよ。」

ミラ

「な、な、な、／／／」カアア！

私がミラにカクの事を話しながら茶化すと、今まで見た事がない位の驚きをし始めた。

そして私はリサーナとエルフマンが、カクを連れて来たのを見つけたのでミラに追い打ちをかけた。

エルザ

「ほら、後ろにいるカクが心配そうにお前を見ているぞ。」ボソッ

ミラ

「¥（／／／／）／」ダッシュ！

私がミラに内緒話をする、顔を真っ赤にさせながら走って行った……どうやらかなり照れてるようだ。

＼Side Out エルザ

＼Side カク

カク

「ミラはどうしたんじゃ？あんなに慌てて何か用事でも有るのか？」

エルフマン

「いえ、今日は日曜日なので予定は無いはずですが……リサーナ、何か聞いてる？」

リサーナ

「私も聞いてないよ。」

ワシはさっまで話していたエルザに話を聞くと、『さあ？』と言われた。その後、ワシがミラに会う度にミラは顔を赤くしている。

第000・6話 ミラの元へ行くと、アクシデント発生。（後書き）

途中で予告があったように主人公の能力を次回報告します。

え、何で能力変えたかと？ご都合主義ですから（笑）

実際は『プロトタイプ』のゲームがそこまで知らないからです。  
いません。m（――）m

ではまた次回！

by天翔る堕天使より。

第000・7話 これからの主人公の能力説明（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。

今はマジですいません、としか言えません。（T ・ T）

能力はもう二度と変えないので、許して下さい。

## 第000・7話 これからの主人公の能力説明

名前 . . . . . カク

性別 . . . . . 男性

一人称 . . . . . ワシ、くじや

容姿

【 服装 】 . . . . . 『 C P 9 』の服装、又は『ガレーラカンパ  
ニ』の服装

【 目 】 . . . . . 黒色

【 髪 】 . . . . . オレンジ色の短髪

【 身長 】 . . . . . 180センチ

【 体重 】 . . . . . 70キロ

【 年齢 】 . . . . . 23歳

く新しい能力く

ろくしき  
六式

C P 9 が体得している6種類の超人的体技。長い訓練を重ね全身を武器とする。6種類すべてを体得した者を「六式使い」と呼ぶ。

指銃<sup>シガン</sup> . . . . 指で敵の体を撃ち抜く。技のバリエーションは「一  
転集中」という点は共通するが、必ずしも「指から」とは限らない。  
基本的に鉄塊が習得できていないと使用不可能。

嵐脚<sup>ランキヤク</sup> . . . . 蹴りで呼び起こす鎌風。

剃<sup>ソル</sup> . . . . 瞬発的に加速し、消えたように移動する移動技。

鉄塊<sup>テツカイ</sup>・・・肉体の硬度を鉄の甲殻にまで高める防御技。但し鉄を砕く程の強度を防ぐ事は不可能。

月歩<sup>ゲツボウ</sup>・・・爆発的な脚力で空を蹴って宙に浮く回避技。

紙絵<sup>カミエ</sup>・・・敵の攻撃を紙の如くヒラヒラと避ける回避技。

六王銃<sup>ロクオウガン</sup>・・・六式を極限まで高めた者が使える六式。

生命帰還<sup>せいめいきかん</sup>・・・意識を身体のあらゆる所に張り巡らせ、操る技。

く詳しい技く

ロボ ルツチ

動物系悪魔の実「ネコネコの実 モデル<sup>レオバルド</sup>”豹”」  
技一覧

六式

指銃「黄蓮<sup>オウレン</sup>」・・・片手で連射する指銃。

剃刀<sup>カミソリ</sup>・・・鋭い軌道で空を走る、剃・月歩の複合技。

\*嵐脚「豹尾<sup>ヒョウビ</sup>」・・・豹形態で放つ螺旋を描いて飛ぶ嵐脚。

鉄塊「空木<sup>うつぎ</sup>」・・・鉄塊によるカウンター。常人ならば拳が割れる。

＊飛ぶ指銃「撥」<sup>バチ</sup>．．．豹形態で、鋭い人差し指の爪の先から  
空気の塊を弾き飛ばす。

＊飛ぶ指銃「三撥」<sup>ミツバチ</sup>．．．アニメオリジナル。撥の3連射。

＊飛ぶ指銃「火撥」<sup>ヒバチ</sup>．．．アニメオリジナル。人差し指の爪の  
先に発生させた炎の塊を弾き飛ばす。

嵐脚「凱鳥」<sup>ガイチョウ</sup>．．．羽を広げた鳥の様な嵐脚で鉄の外版に切れ  
込みを入れる。

指銃「斑」<sup>マダラ</sup>．．．両手で連射する指銃。

六王銃<sup>ロクオウガン</sup>．．．六式を極限以上に極めた者が使える六式最終奥義。  
両手の握り拳を相手に構えて衝撃を送り込む。

＊最大輪「六・王・銃」<sup>さいだいりん ろくおうがん</sup>．．．生命帰還を解除し、相手が逃げ  
られないように尻尾で掴みフルパワーで放つ六王銃。

＊生命帰還<sup>カミエフシン</sup>．．．紙絵武身生命帰還の一種で筋肉を収縮するこ  
とでパワーを落とす代わりにスピードを上げる。

カク

動物系悪魔の実「ウシウシの実 モデル”麒麟”<sup>キリン</sup>」

技一覧

六式

嵐脚「白雷」<sup>はくらい</sup>．．．上方から撃ち落す嵐脚。

嵐脚「乱」らん・・・嵐脚の乱れ撃ち。

\*嵐脚「周断」あまねだち・・・キリン形態によるリーチ・重量増大、そしてこれによる遠心力を利用して放つ最強の嵐脚。

嵐脚「線」せん・・・一直線に走る嵐脚。

\*鼻銃じガン・・・キリン形態の鼻で放つ指銃。岩に穴を開けるほどの威力がある。

\*極・鼻銃「麒麟マン射櫓（キリマンジャロ）」・・・首を縮めた「麒麟砲台」から撃ち出す究極の鼻銃。

\*鉄塊「無死角」ムシカク・・・鉄塊状態で体を折りたたんで四角にする。

\*嵐脚「麒麟時雨」キリしぐれ・・・嵐脚を天井に向かって乱れ撃ちし、天井から跳ね返ってきた斬撃の礫を降らせる。斬撃は自分にも降りかかるが鉄塊で防ぐ。

\*嵐脚「龍断」ロウダン・・・両足で縦に放つ嵐脚。

\*嵐脚「ネジ白刃」ネジはくじん・・・体を回転させながら放つ嵐脚。

嵐脚手裏剣・・・手裏剣状の嵐脚を乱れ撃つ技。

\*鎌麒麟・・・キリン形態の首で相手をなぎ払う。

\*パスタマシン・・・首を縮めすぎると何故か手足が伸びてし

まったことで命名。邪魔な首を仕舞い手足のリーチが長くなる利点がある。

★鞭竹林へんちきりん・・・首を鞭のように相手に叩きつける連続攻撃。

★猛竹林もうちきりん・・・鼻銃の連続攻撃。

★逆鱗げきりん・・・嵐脚・二刀を使った四刀攻撃。

## ジャブラ

動物系悪魔の実「イヌイヌの実 モデル”狼”ウルフ」

六式使いで唯一、全身鉄塊状態で動く事ができ、それを利用した「鉄塊拳法」を駆使する。

## 技一覧

### 六式

ジュッシガン

十指銃・・・両手の付け根を合わせて攻撃する十本の指による指銃。

ゲッコウジュッシガン

月光十指銃・・・月歩で勢いをつけた十指銃。

★嵐脚「孤狼」ころう・・・波の様に跳ねていく嵐脚。

ルーバースフォール

★嵐脚「群狼連星」・・・4つの狼の形をした嵐脚を放つ。

てっかいけんぽう

## 鉄塊拳法

オオカミハジキ

★狼弾・・・鉄塊をかけた両腕で敵を弾き飛ばす。

＊狼牙ろうがの構え。．．．鉄塊をかけた防御技での構え。

＊狼芭ろうばの構え。．．．腰を落とした状態で両手について、体を浮かせた構え。

＊狼狩ろうかうエリア・ネットワーク。．．．狼芭の構えから四方八方から浴びせる斬撃。

＊重歩狼ドン・ボー・ロウ。．．．鉄塊をかけた手で放つ強力なパンチ。

＊魔天狼マテンロウ。．．．鉄塊をかけた両足で敵を蹴り上げる。

## ブルーノ

超人系悪魔の実「ドアドアの実」  
六式

鉄塊「輪りん」。．．．鉄塊状態で両足を一直線に伸ばし、側転のように、回転しながら攻撃する。

鉄塊「碎さい」。．．．鉄塊状態で相手を殴りつける。

鉄塊「剛こう」。．．．最強強度の鉄塊。

ドアドア。．．．壁などの触れた物にドアを作る。閉じると元に戻る。

空気開扉エアドア。．．．ドアドアの実の真骨頂。大気の壁にドアを作り出し自由に移動ができる。

回転ドア・・・触れたものに回転ドアを作る。ドアドア同様閉めると元通りになる。

## フクロウ

### 技一覧

#### 六式

六式遊戯「手合」てあわせ・・・相手の体技の強さを攻撃を受けることによって測る能力。

獣敵ジュゴン・・・指銃の速度で打ち抜く超重量パンチ。

「獣敵」奥義鼻叩きフクロ・・・獣敵の連打。

鉄塊玉テツカイタマ・・・鉄塊状態、かつ剃の速度で高速回転して相手に突っ込む。

紙絵「軟泥」スライム・・・体をスライムの様に変形させて攻撃を避ける。

今回はクマドリとカリファの能力は無しの方で行かせてもらいます。

【\*】このマークはその悪魔の実を使用中にならできます。  
見た目はカクですが、ルッチやジャブラの悪魔の実使用中はルッチやジャブラが悪魔の実を使っている姿っぽくなります。  
もちろんカクもそうです。

「魔法剣とエルザの能力っばいやっ」

『魔法剣』と言っても、カクがゾロと戦っていた時の普通の刀。但し、自分の身体の大きさに合わせて、刀も大きくなる。

『エルザの能力っばいやっ』とは、ただ単に自分の服装を変えるだけで、『能力付きの鎧』とかにはならない。ただの『服装が変わる』程度。

第000・7話 これからの主人公の能力説明（後書き）

何だか、膝が痛いので温めながらねます。

皆さんも体調管理には気を付けて下さい。

ではまた次回！

b y天翔る墮天使より。

第000・8話 時は過ぎて 原作突入1週間前 (前書き)

どうも天翔る堕天使です。

最近iPhoneのメモ帳に下書きをしていたら、メモ帳の中身のデータが吹っ飛びました。(笑)

あの時はショックのあまり、全力投球でiPhoneベツトに投げ込みました。(´Д、`)y・

そんなこんなで始まります。

## 第000・8話 時は過ぎて 原作突入1週間前

Side カク

どうもこんにちは、フェアリーテイルのギルドに所属している力クじゃ。今は原作突入の約1週間前になって、ワシは23歳になった頃じゃ。

この間に合った出来事を簡単に分かりやすく箇条書きで説明をしていこう。

1・S級魔導士になった。

\*理由は特に無し。

2・ミラの妹、リサーナがエドラスに飛ばされた。

\*止める理由は無く、原作に沿っていく為。

3・ミラと付き合ってる。

\*決定事項。

4・ギルターツにあの薬を渡した。

\*原作で酷い怪我した筈だから。

5・異名を幾つか貰った。

\*【山風】やまかせ【嵐】あらしこれは、『正規の人達』によく言われる。理由としてはよく走り回っているからじゃと思う。

\*【妖精の化物】フェアリーモンスター【動物化物】アニマルモンスターは『闇ギルドの関係者』によく言われている。悪魔の実でや六式、ベクトル操作で暴れてるからみたいじゃ。

ワシが依頼を終えて森の中にある一本道を通ってギルドに帰っていると、目の前から荷台を引いてる3人組が目に入った。一見すると特に変わった所は特に無いただの商人だが、1人がワシに気付いたのか前にいる2人に話し掛けている。

ワシは見聞色の覇気で、何気なく荷台に積まれている荷物を確かめてみると、荷物の中から数人だが人の気配がした。恐らく盗賊か何かの類じゃろう。

カク

「そこの商人さん。道を聞きたいんじゃないかと良いかの？」

商人A

「悪いが俺らはここら辺には住んでいないから、あまり知らないんだよ。すまん。」

あくまでも奴等には知らないフリをして荷台にいる人達に危害が加わらないようにする為なるべく『敵意』を与えないつもりじゃったが。

カク

「そうじゃったか、急に話し掛けてすまんの。しかし、荷台に人を入れて運ぶのはなかなか出来る事では無いんじゃないのか？」

商人A

「な、何の事でしょうか？」

商人B

「おい、やれ。」ボソツ

カク

「何をやるつもりなんじゃ？」スッ

商人A & B & C

「「「「！」「」」」」

ワシは剃<sup>ソル</sup>で瞬発的に加速して消えたように移動し、商人Bと商人Cの首筋に刀を突きつけた。

商人Cは既に右手に魔法剣を出していたので明らかに怪しい。仮に『やましい事』が無いのであれば抵抗はしない筈だが。

商人B

「べ、別に俺らは何もしてないぞ！」

商人C

「た、ただ単に荷物を運んでいるだけだ！」

カク

「本当の事を言っと？」ギロツ！

商人A

「盗みました！」

ワシは取り敢えず、嘘をついた商人B & Cの首を刎ねて絶命させた。次に怖気付いている商人Aに、刀を向けて『何処から盗んだ』のか聞くと恐怖で慌てている。

仕方がなく刀を仕舞い、男の髪の毛を掴み上げて無理矢理立たせ商人Aに再度聞いてみた。

カク

「10秒以内に『何処から盗んだ』か答えるんじゃ。10・・・9・

・ 8 ・ ・ 7 ・ 6 ・ 5 ・ 4 「お、俺達が来た道を1キロ程も、戻った所の街からです！」 ・ ・ ・ わかった。指銃<sup>シガン</sup>！」 ドスッ！

商人A

「な・なん・で・ ・ ・ 。」 ドサッ

カク

「ワシは別に『助けてくれ。』と言われた覚えはないぞ？ さて、取り敢えずは荷台にいる人を起こすかの ・ ・ ・ こいつ等を片付けてから。」

ワシはひとまず3人を道の見えない所に隠して荷台にいる人を起こした。 どうやらガスか何かで眠らされており、目立った怪我はしていなかった。

その後ワシは荷台にいた数人に事情を話して、街まで案内をして貰い彼らの街に着いた。 そして同時にワシは逃げた。 何故って？

街の皆が荷台にいる人達を見たら、鬼の形相で駆け寄って来たからじゃ。 ワシは当然、剃<sup>ソル</sup>と月歩<sup>ゲッポウ</sup>を使いその場からダッシュでギルドの方へ逃げ去った。 因みに月歩<sup>ゲッポウ</sup>とは爆発的な脚力で空を蹴って宙に浮く回避技である。

カク

「ここまで離れればもう来ないじゃろ ・ ・ ・ んっ？ あの後ろ姿は ・ ・ ・ ミストガンかの？ ・ ・ ・ よっ。 ミストガン最近の『アレ』の方はどうじゃ？」

ミストガン

「カクか、久し振りだな。 『アレ』はまあまあだよ。 数は前より少ないけど少しずつ大きくなって来ている。」

今ワシと話している男が『ミストガン』又の名を『エドラス版ジエラル』。だいぶ前に仕事先で出会った時には『アレ』を塞いでいる時だったのでかなり気まずい雰囲気だった。

その結果出た結論が『この事は秘密にする』という普通の結果だった。因みにミストガンは『妖精の尻尾最強の男候補』フェアリーテイルでもあるらしい。

カク

「そうか。そういえば薬の方は大丈夫か？また補充でもするかの？」

ミストガン

「いや、まだ大丈夫だろう。『大きくなった』と言ってもそんなに立て続けには無いし、塞げれるから平気だ。」

カク

「そうか・・・ではまた、機会があれば会おうかの。」ニコッ  
ミストガン

「フッ、そうだな。またいずれ会おう。」

ワシはミストガンにそう言うと、互いに反対方向に進んで行った。ワシはギルドなは向かい、ミストガンは依頼をこなすか『アレ』を塞ぎに行った。

Side Out カク

第000・8話 時は過ぎて 原作突入1週間前 (後書き)

今回はだいぶ短い話でしたが、次回も短いと思います。

そろそろ大晦日が近づいて来たので、皆さん羽目を外さないよう  
気を付けて下さい。

ではまた次回。

by天翔る堕天使より。

第000・9話 時は過ぎて 原作突入1日前 (前書き)

どうも！天翔る堕天使です。

次回から前書きを書かなくなるかもしれないので、ご理解して下さいm ( \_ \_ ) m

そんな訳で始まります。

第000・9話 時は過ぎて 原作突入1日前

Side カク

ついに明日が原作突入の日じゃ。確かナツがハルジオンの街に行き『ルーシィ』という人物に会うはずじゃ。なのでワシは明日の予定を開けておいてナツと行った方が良いと思い、依頼を2・3個片付けて帰って来た。

すると『アルザック』という青年がワシに声をかけて来た。

アルザック

「カ、カクさん相談したい事が有るんですがよろしいですか？」

カク

「構わんぞ。じゃがビスカとの恋愛相談については、上手く教えられるか分からんがの。まあ、座って話そう。」

アルザック

「な、なんで解ったんですか！／／／」

彼の名前はアルザック。西武の大陸から移民でやって来た魔導士。  
技は銃弾魔法という銃に魔法の弾を装填する魔法。  
ガンズマジック

彼は同じギルドに所属している『ビスカ』に気が有るのだが、なかなか思いが告げられないのている。しかし周りの人の大半は、その事については気づいている。

カク

「逆に聞くが、お主はその相談事を今年でワシとミラに何回きってきたのかの？」

アルザック

「ご、5回程でしたっけ。」

カク

「残念ながらその数は今月の回数で今年の回数は覚えてる限りで20回程じゃ。そういえば何故お主は告白しないんじゃ？」

実はアルザックはビスカの事が好きであり、ビスカはアルザックの事が好きというまさかの両思いなのだが、なかなか思いが告げられないのでそのままの関係になっている。

もちろんこの事はギルドのほぼ全員が知っているが、誰も教えないでいる。

アルザック

「そ、それは・・・その・・・ビ、ビスカが僕の事・・・好きか分からないし・・・そ、それに僕はカッコ良くないから。」

カク

「アルザック、それはワシからすれば嫌味にしか聞こえないんじやが・・・取り敢えず殴ってもいいかの？」ニコッ

アルザック

「へっ？」

ワシは取り敢えずアルザックにブチ切れそうじゃったが、なんとか踏み止まった。ブチ切れる理由？ワシの鼻を見てから言ってほしいもんじゃ。

今のワシを遠くから見れば笑顔でアルザックと笑い話をしている

ようじやが、実際は青筋を立てながら笑顔で怒っている。

初めの頃はナツやグレイに鼻の事で笑われていたから、動物系悪魔の実「ウシウシの実 モデル”麒麟<sup>シラフ</sup>”」で1日中追いかけて回したり、半殺しにしたお陰でギルドの皆からは「カクに鼻の事で茶化してはいけない。』と、暗黙の了解ができた。

もちろんこの事を何も知らずに茶化した人には、脅しを入れた分  
かりやすい説明をしている。

アルザック

「あ、いや、そんなつもりはないんですよ。そ、そういえばカクさんとミラさんってどうやって付き合っただんですか？」

ミラ

「はい。それは私が説明しましょう。」

アルザック

「ミラさん！」ガタツ！

カク

「いつからそこにおったんじゃ・・・いや、何処からワシ達の話  
を聞いておったのじゃ。」

この女性がワシと付き合っている『ミラジエーン』で、妖精の尻  
尾の従業員をやっている、ギルドの看板娘。別の仕事で、雑誌でグ  
ラビアの仕事をしている為、ある程度の有名人。

ミラ

「アルザックが『そ、それは・・・その・・・ビ、ビスカが僕の事・・・  
好きか分からないし・・・そ、それに僕はカッコ良くないから。』つ  
て辺りからよ。」「ニコッ

アルザック

「か、かなり最初の方ですね。／＼」

カク

「はあ、それでミラはワシ達に何の話をしてくれるんじゃ？」

ミラ

「もちろんカクとファーストキスをした時の話をするつもりだけ  
ど？どうして？」

カク

「」

ワシは取り敢えずその場から立ち去ろうと席から立ち上がると、  
ミラがワシの服の裾を両手で掴みながら涙目で上目遣いをしたので  
仕方がなく席に座った。

女の涙は何より強い。もし核爆弾を落とされたとしても、1人の  
綺麗な女性が泣いていたら核爆弾は簡単に負けれると思う。

ミラ

「別にいいじゃない。減るもんでもないのに話す位なら。それに  
アルザックの為でもあるのよ・・・協力してくれる？」ウルウル  
カク

「もちろんOKじゃ、いくら言っても構わんど。キスが終わった  
後にワシが『ピー』をしてミラが『ピー』した後にワシとミラ  
が『ピー』して2人で『ピー』をした話とかもOKじゃ。」  
アルザック

「なっ！？」

ミラ

「あら、でもキスが終わった後はカクが『ピー』をして私が『  
ピー』した後に私達で『ピー』してる時はまるで『野獣』みた

いにすごかったわ。」

アルザック

「ちょ、ちょっと待って下さい！僕はミラさんからカクさんと始  
めてのキスをした話を聞くだけであって、その後は別に興味が無い  
わけではないですが今はいいです！」アセアセ！

どうやら少し・・・いや、かなり話が脱線してしまったのかもしれないが今日の本題に入るとするかの。ワシとミラはファーストキ  
スの状況を詳しくアルザックに教えた。

内容は、ほぼノロケ話だったのは言うまでもない。

カク

「と、まあその時の状況は噛み砕いた言い方で言えばこんな感じ  
かの。まあ、後はワシがミラにキスをする時にワシの鼻が長いのを  
すっかり忘れていて、ミラの顔に当たってしまった位かの。」

ミラ

「あの時は私達緊張してたからかもしれないけど、それのお陰で  
その後はリラックス出来たしね。その後に『ピーー』とか出来たか  
ら今となっては良い思い出よね。」

ワシとミラが2人だけの世界に入りそうになっていたが、ワシは  
横に黙って座っているアルザックに話を振った。

カク

「ところでアルザックは、どこまで話をきちんと聞いていたのか  
教えてくれるかの？」

アルザック

「……途中から聞いてませんでした。」（／／〇／／）

ミラ

「もう……要は、『アタックしたらなんとかなるもの』って事よ。アルザックは奥手だから少しはビスカを押してみれば？」

カク

「そうじゃの、じゃがあまりアタックし過ぎてはいかんぞ。時には優しく接しないと『ジエット』と『ドロイ』みたいになっちゃうからの。」

ワシの話に出て来た『ジエット』と『ドロイ』とは、アルザックと同じ様にギルドにいる『レビイ』に気が会ったのだが、2人は全力で告白したのじゃが、瞬殺されたらしい。

その後レビイはワシに恋愛相談したのだが、どうやらあの2人はタイプでは無かったようじゃ。一応ワシはレビイに『早いうちに相手は見つかるじゃろう。』と言っておいた。

ミラ

「ならアルザックとビスカの2人で今度ランチでもしながらデートでもしてみれば？もちろんビスカには『一緒にランチでも？』って言えば何とかなるんじゃない。」

カク

「それは名案じゃのうミラ。じゃが今のアルザックにはまず、付き合う方が先じゃろう。」

アルザック

「が、かんばります。」

今回のアルザックとの恋愛相談は終わり、アルザックは席から離れて行くのを確認した後に『ロキ』を呼び寄せた。ロキにはアルザックに『ビスカは可愛いから早くしないとつちゃうよ。』も言うてもらおうように頼んでおいた。

ロキは最近来たのじゃが、どうも精霊らしい。この事を知っているのは恐らくワシだけなのでよく気を使っではいる。それなのだが彼は、『自業自得さ。』とよく笑顔で言っている。薬を渡して飲ましても効果は薄いが、効果が無いよりましと思い1ヶ月に1回飲ましておる。

カク

「これでアルザックも、どうにかなるじゃろう・・・んっ？ナツがやけに騒がしいの。ミラ、ちょっと席を外すぞ。」

ミラ

「はい、いつてらっしゃい。」（ 、 ）ノシ

ワシは一旦席から離れて、騒がしいナツ達のそばに近寄り話に紛れ込む事にした。

ナツ

「それ本当か！ハルジオンの街に火竜サラマンダーがいるのか！」  
モブ出っ歯

「ああ、俺の聞いた噂だとそうだぜ。でも今日から行くと遅くなるんじゃないか？」

ナツ

「そんなの気にしねえよ。もしかしたらイグニールかもしれねえんだからよ、はやくしてえーじゃんか！」  
ハッピー

「でもナツは乗り物に乗れないから無理じゃないの？」  
カク

「ならワシも着いて行っても良いかの？丁度ワシも明日ハルジオンの街に用事があるからついて行くのはいいかの？」

ワシは、ナツについて行く為に嘘ではないがついて行く為の口実を持ち掛けた。

ナツ

「本当か！じゃあ頼むぞカク！ハッピー、今からハルジオンの街に行く準備するぞ！」

ハッピー

「あい！」

カク

「気が早いのに。行くのは明日だというのに・・・取り敢えずワシも支度でもするかの。」

ワシらは明日ハルジオンの街に行く為に支度を始めた。早く明日にならんか楽しみじゃったが、先程頼み事を任せた口キが『アルザックにライバル相手にされちゃったよ。』と愚痴って来た。

Side Out カク

第000・9話 時は過ぎて 原作突入1日前 (後書き)

やっと次回から原作突入出来るのでかゝなりテンションがアゲアゲです！

♪——○——)——○——♪

ではまた次回！

b y天翔る堕天使より。

第001・0話 妖精の尻尾・・・前半

Side カク

駅員

「あ・・・あの・・・お客様・・・だ・・・大丈夫ですか？」

駅員は具合の悪そうなナツに声をかけた。

ハッピー

「あい。いつもの事なので気にしないで下さい。ハルジオンの街に着いたよカク。」

カク

「んっ？そうか、起こしてくれてありがとうハッピー。それにしてもナツは相変わらずじゃの。」

ナツは乗り物が苦手で『乗り物』なら5秒はもたない程に苦手なのだ。それなのに今日は列車でハルジオンの街までやって来た。

ナツ

「無理！！もう二度と列車には乗らん・・・つぶ」

ハッピー

「情報が確かならこの街に火竜サラマンダーがいるハズだよ。行こ。」スタスタ

カク

「よっこいしょ。ワシらは先に降りているから早くついて来るんじゃぞナツ。」スタスタ

ナツ

「ちょ……ちょっと休ませて……」グデー

ハッピー

「うんうん……あ」

ナツ

「!」

ワシとハッピーは先に列車から降りてナツが来るのを待っている  
と、ナツを乗せた列車は次の駅に向かい走り出した。

ハッピー

「出発しちゃった……どうしようカク。」

カク

「はあ、ハッピーはココで待っていてくれるかの。すぐにナツを連れて来る。」つ小魚

ハッピー

「あいさ!」モキュモキュ

ナツ

「た〜す〜け〜て〜」

ワシはナツを助けに走っている列車に飛び乗り、ナツを引き摺り下ろした。どうやらまだ酔っているようじゃが気にせずによいようかの。

＼Side Out カク

＼Side ルーシイ

ルーシイ

「えーっ！っ！？この街って魔法屋が一軒しかないの？」

店主

「ええ・・・元々、魔法よりも漁業が盛んな街ですからね。町の者も魔法を使えるのは一割もいませんので、この店もほぼ旅の魔導士専門店ですわ。」

「どうやらあたしの欲しかった『<sup>ゲート</sup>門』はあまり期待が持てそうもないわね。」

ルーシイ

「あーあ……無駄足だったかしらねえ。」

店主

「まあまあそう言わずに見てってくださいな。新商品だつてちゃんとそろつてますよ。女の子に人気なのはこの『色替<sup>カラーズ</sup>』の魔法かなその日の気分に合わせて・・服の色をチェンジつてね。」シャキーン

ルーシイ

「持つてるし。あたしは『門<sup>ゲート</sup>の鍵』の強力なやつを探してるの・・あ？『白い《ホワイト》小犬<sup>ドギ</sup>』！！！！」

やっと探してた内の一つが見つかった！あんまり強くはないけど可愛いから欲しかったのよ。

店主

「そんなのぜんぜん強力じゃないよ。」

ルーシイ

「いーのいーの？探してたんだあー。いくら？」

店主

「2万」

うーんちょっと高いかな。ならココはあたしのお色気作戦！胸を

両腕で少し持ち上げて見える様にかがんでからの上目遣い。

ルーシー

「本当はおいくらかしら？ステキなおじさま？」ムニユ？

これでどうだっ！

ルーシー

「ちえっ、1000」しかまけてくれなかったー。あたしの色気は1000」かーっ！！！」

。さっきのお色気作戦は失敗して少ししか負けてもらえなかった・・ムシャクシャしたので近くの看板に八つ当たり！  
街の人がびくついてるけど気にしないでいよっと。

ルーシー

「！」

前の方を見ていると、黄色い歓声が上がっているのに気がついた。  
大勢の女の子が広場に集まっているみたい。

ルーシイ

「?何かしら。」キョトン?

あたしが首をかしげていると横から女の子が話ながら駆けている。

女達1

「この街に有名な魔導士様が来てるんですって!」

女達2

「火竜様よーっ?」

後ろからきた女の子達に弾き飛ばされそうになってしまった。  
でも、今は怒る事よりも先に、

ルーシイ

サラマンダー

「火竜!?!? あ・・あの店じゃ買えない火の魔法を操るっていう・・。この街にいるの?!?!?」パアッ!

あたしの興味は一気にそちらにむいてしまった。だってとっても有名な人物だしそれに、

女達

「きゃー、きゃー、サラマンダー火竜様こっち向いてきゃー、き

ヤー「「「「」」」」」

目をハートにした女の子達がどんどん増えていくみたいだから・  
・。

ルーシィ

「かつこいいのかしら」

しょうがないよ、あたしもその女の子の1人だもん！あたしも火  
竜<sup>ンダー</sup>のところへ行ってみることにしようと。  
サラマ

＼Side Out ルーシィ

＼Side カク

ナツ

「列車には2回も乗っちゃった・・・はあ。」

ハッピー

「ナツは乗り物凄く弱いもんね。」

カク

「コレなら歩いて来た方がまだマシじゃったかもな。」

ナツ

「ハラは減ったし……」

ハッピー

「オイラはさっきカクから魚を買ったから平気だよ。」

カク

「ナツ、後で好きなだけ奢ってやるから我慢せんか。」

ワシはヨタヨタ歩いているナツと満足そうなハッピーと歩いておる。

今のワシの服装はというと、『ガレーラカンパニー』の服装じゃ。この服はだいぶ気に入っているからあと3着は持っている。

ナツ

「サンキューなカク。なあ、火竜<sup>サラマンダー</sup>ってのは『イグニール』の事だよなあ」

ハッピー

「あい。火の竜<sup>ひりゅう</sup>なんてイグニールしか思いあたらないよね。」

ナツ

「だよな……やっと見つけた！ちょっと元気になってきたぞ！」

ハッピー

「あい。」

カク

「にしても何処どこにおるのか分からの。」

ワシは見聞色の覇気で街中を捜しておると、見覚えのある『女の子』とあの『いけすかない男』が随分近くにいた。

そして耳を済ませておると女達の歓声が聞こえてくる。

女達

「『『『サラマダー  
火竜様』』』」

ナツ&カク&ハッピー

「『『『!』』』」

ナツ

「ホラ!!噂をすればなんたらって!!」

ハッピー

「あい!!!」

カク

「あつ!待つんじゃナツ!」

ワシが驚いている間にナツとハッピーは顔を輝かせて声の方へ走っておる。まるで欲しかったオモチャでも見つけたようじゃ。

Side Out カク

Side ルーシィ

女達

「「「「「キヤー、キヤー、キヤー」「」「」」」」」

ルーシィ

「（な．．な．．なに？このドキドキは！！？．．．ちよと．．！！あたしってばどうしちゃったのよ！！！）」

サラマンドー  
火竜

「ははっ、まいったな。これじゃ歩けないよ。」

女の子の中心でたたずむ一人の男。どうやら彼が<sup>サラマンドー</sup>火竜みたい。あたしはその人を見た瞬間に平常心じゃいられなくなっちゃった。えっ？なんで？

サラマンドー  
火竜

「ん？」チラ

ルーシィ

「（はうう！！！！！！）」キュン

ドキドキしていると彼と目があっちゃった！だめ、胸がくるしいっ！

ルーシィ

「（有名な魔導士だから？だからこんなにドキドキするの！！？）

」

ナツ

「イグニール！！イグニール！！！！」

なんだか変な声が聞こえるけど不思議と気にならない。

ルーシィ

「（これってもしかしてあたし・・・）」ふらっ

あたしが彼に少しでも近づこうと一歩踏み出そうとしたその時、

ナツ

「イグニール！！！！」

カク

「ちょっと待たんかナツ。」

1人の少年と1匹の猫、その後ろに1人の鼻が長い男性が目の前に突然現れた。

Side Out ルーシィ

Side カク

ナツ

「イグニール!!!!!!」

サラマンドー  
火竜

「!!」

ルーシィ

「はっ!!!!」

カク

「（ああ、彼女がルーシィか・・・意外と可愛いのに）」

ワシとナツとハッピーは一緒に女達の中に割り込んで来た際に、見たことある女の子を見つけた。

じゃがこの時はあえて知らない振りをするのが鉄則じゃ。お互い始めて顔を見たのに名前を知っていたら変に警戒されてしまうから

の。

しかしナツが入った瞬間はまるで時間が止まっているみたいじゃの。まあ、それでルーシィは正気に戻ったみたいじゃから良しとするかの。そしてナツの一言で時は動き出した。

ナツ

「誰だオマエ」

サラマンダー  
火竜

「!!!」

汗をかなり流しているナツと、ナツの言葉にショックを受けている男がしばらく顔を合わせていると、

サラマンダー  
火竜

「火竜と言えばわかるかね？」 キリッ

男・・・もとい、  
サラマンダー  
火竜が決め顔を作ってまで言うてくるのじゃが、

サラマンダー  
火竜

「はやっ!!」

この男は後ろにいるナツとハッピーにビックリしている。何故って遠くには落ち込んでいるナツとハッピーが『トボトボ』と効果音

が似合う程の暗さで帰っているからじゃ。

なんだか気まずいのでワシはこの男に結果は解っているが、あえて質問を試みることにした。

カク

「お主は見かけによらず・・・『ドラゴン竜』なのか？」

サラマンダー  
火竜

「はあ！？そんな分けないでしょ！？俺は見かけ通り人間だつ！  
！」

いや、そこまで怒らんでも良いじゃろ。

カク

「イグニールではないのか？」

サラマンダー  
火竜

「違うっ！！俺はそんな名前じゃない！！俺は火竜だ！！！！」

やはり人違いだったらしいので諦めて帰るとするか。

女1

「ちよつとアンタ失礼じゃない！」ぐいっ！

ナツ

「おっ!？」

女2

「そうよ!!<sup>サラマンダー</sup>火竜様はすごい魔導士なのよ!」

ナツ

「おっ?」

女3

「あやまりなさいよ!」

ナツ

「なんだオマエら!？」

そうこうしてるとナツが女達にマフラーを掴まれ、首を絞められながら帰ってきたようじゃ。お帰り……かの？

<sup>サラマンダー</sup>  
火竜

「まあまあその辺にしておきたまえ。彼とて悪気があった訳じゃないんだからね」

この男はまたキメ顔でナツに話し掛けたがナツは相変わらずどうでもいいらしい。女達の黄色い声に適当に答え男は自分のサインを書き出した。

ルーシイはこの男を睨んでるみたいじゃの。そして書き終わったらしくナツにひざまずきながら、

サラマンダー  
火竜

「僕のサインだ。友達に自慢するといい。」

またしてもキメ顔をして言う火竜<sup>サラマンダー</sup>。周りからの黄色い声に対して  
ナツは一言、

ナツ

「いらん」

そしてそれを断わるナツ。ナツ、もう少しだけ悩む素振りを見せ  
ようにせんか。大人になってからじゃ遅いからの。

女達

「「「なんなのよアンタ！！！どっか行きなさいっ」「」「ドゴッ

ナツ

「うごっ」「ズシャ

カク

「紙絵<sup>カミエ</sup>。まったく危ないの。」

当然のようにけりだされるナツ。ワシは紙絵<sup>カミエ</sup>で敵の攻撃を紙の如  
くヒラヒラと避ける回避技を使って人混みから遠ざかった。

サラマンダー  
火竜

「君達の熱い歓迎には感謝するけど……僕はこの先の港に用があるんだ。失礼するよ」パチンッ

そう言って男が左手の指をはじくと、炎が出てきて男が舞い上がる。

サラマンダー  
火竜

「夜は船上でパーティをやるよ。みんな参加してくれるよね？」

女達

「……もちろんです」

周りにいた女達を誘う男はそのまま港の方へ行っただようじゃ。

ナツ

「なんだアイツは」

カク

「ただの火の魔導士じゃろうな。恐らくじゃがそんなに強くは無  
いじゃろうかの。」

ナツ

「？何でカクはそんなの分かるんだ？」

カク

「何となくじゃがそんな気がするだけじゃ。」ニカッ

ワシとナツが話していると急に後ろから

ルーシィ

「本当、いけすかないわよね。」

ナツ&カク

「んっ?」

後ろを向くと濃いブロンドの髪をくくった女の子がそこに居<sup>お</sup>った。  
まあ、ルーシィが声をかけてきたのじやかの。

ルーシィ

「さつきはありがとね」ニコッ

ナツ&ハッピー

「?」

カク

「こんにちはお嬢さん。別に気にせんでも良かったのじやが。」

ナツとハッピーは首をかしげていたが、ワシは挨拶をしてみた。

Side Out カク

Side カク

ナツ

「あんふぁいいひほがぶぁ」グバボバボバボ！！

カク

「今ナツは『アンタいい人だな。』って言ってるようじゃ。」モ

グモグ

ハッピー

「うんうん。」ほぐほぐ

ワシは暴走するかにように飯を食べるナツの通訳をしながら飛んで来ている『汁』を避けながらルーシイをかばっている。

そしてコレは浮気ではないから時々肩を掴んで『汁』を避ける為に引張っても何も問題は無いはずじゃ。

因みにワシらはルーシイと一緒にレストランに入っている。

ルーシイ

「あはは・・・ナツとハッピーだっけ？ ゆっくり食べなって。それにカクさんはもつと食べなくていいんですか？」

ルーシイは苦笑気味にワシに聞いてくるが、この子はいいい子じゃの……胸はデカイがミラ程ではないの。

カク

「ああ、ワシはこの位で平気じゃ。それにワシが全部出すからルーシイさんも食べんかの？」

ルーシイ

「えっ！？困りますよそんな。あたしは助けてもらっただけですから。」

ルーシイは、さっきの火竜サラマンダーチャームは魅了を使っていたらしくあれは発売が禁止にはされていたらしい。あの場に居た女達が少し心配になってきたがワシらが何とかするから平気じゃろ。

じゃがルーシイはワシ達が飛び込んだおかげで魔法が解けて助かったみたいじゃ。

カク

「いいんじゃないよ別に。ワシはコレでも結構稼いでるから平気じゃ。ナツだって君を助けようと思って助けたわけじゃないんじゃない。それに『カワイイ年下の女の子』に奢らせたら男として恥ずかしいからの。」

ワシがそういうと少しだけ頬を紅くしてルーシイは引き下がった

のでウェイトレスにパフェのセットを1つ頼んだ。

ルーシィ

「あつ、そういえばこう見えてもあたし魔導士なんだあ」

カク

「ほう、そうじゃったのか。」

ナツ

「ほぼお」グボバボバ

ワシは相槌を打つがナツは何を喋っているのか全く解らなくなつた。

ルーシィ

「まだギルドには入ってないんだけどね？ あ、ギルドって言うのはね、」

カク

「あ、その事については大丈夫じゃ。ワシの記憶ちゅうかいじゃと仕事や情報ちゅうかいを仲介してくれたりする組合の様なものじゃろ？」

ルーシィ

「はいっ！そうなんです！カクさんも詳しいんですね！」

嬉しそうな声を挙げるルーシィはそのままのテンションで、

ルーシィ

「でも人気のあるギルドは入るのが厳しいみたいです・・・。  
あたしの入りたいトコはもうすっごい魔導士がたくさん集まる所で・  
・ああ・・・・どーしよ！！入りたいけどき厳しいんだろーな  
あ・・・。」

ナツ

「いあ・・・」

ルーシィ

「あーゴメンね魔導士の世界の話なんてわかんないよねー・・・  
でも、絶対そこのギルドに入るんだあ。あそこなら大きい仕事たく  
さんもらえそうだもん」

カク

「・・・立派じゃの。」

思わずワシは褒めてしまう。何故って、これ・・・うちのギル  
ドの事じゃないのかの？なんだか現実とかけ離れている様な感じな  
のじゃが・・・気にせんでおこつ。

暫しの沈黙が続いていたが、ナツとハッピーは

ナツ

「ほ・・・ほおか・・・」

ハッピー

「よくしゃべるね」

お主等は相変わらず失礼だな。ワシは心の中でため息をつき、目の前にあるパンをかじった。

ルーシィ

「そういえばあなたたちは誰か探してたみたいだけど……」

ルーシィが聞いてくると、

ハッピー

「あい、イグニール」

ナツ

「火竜サラマンダーがこの街に来るって聞いたから来てみたはいいけど別人だったな。」

ハッピー

「火竜サラマンダーって見た目じゃなかったもんね。」

ナツ

「てつきりイグニールかと思ったのにな。」

ワシはこの全部がおかしいナツとハッピーの会話をルーシィと聞



ルーシィ

「オイイ！！！！今気づいたって顔すんなー！！！！」

カク

「……………」ズズズツ

ワシはルーシィのツツコミを聞いてコーヒーを飲んだ。ルーシィ、  
ナイスツツコミじゃ！

くしばらくしてく

ルーシィ

「さて、あたしはそろそろ行くけど・・・」

その後すこし話していたら、ルーシィが立ちあがる。

カク

「そうか、ではまた機会があれば会おうかの。」

ルーシィ

「あ、でもカクさん。これだけはもらってくれませんか。」

カク

「んっ？何をじゃ？」

ルーシイはワシに出してきたのはお金じゃった。いらないうつた筈なんじゃが……。

ルーシイ

「あたしが助かったのは事実ですから……少ないけどもらってほしいんです。」

カク

「そういうことか……すまんの、ルーシイさん。」

ルーシイ

「いえ、お構いなく。じゃあねナツ、ハッピー、カクさん。」

そういつてルーシイはレストランから出て行こうと席から離れていく。するとナツが、

ナツ

「じゃあこれやるよ」「つ色紙

ナツはいつの間にか火竜のサインを貰ったらしく、それをルーシイに渡そうとしたのだが、  
サラマnder

ルーシイ

「いらんわっ！！！」

ルーシイに断られている。

その後ワシらはイグニールを探して街を回っていたがワシは途中からナツと別行動になり、適当に時間を潰していた。

Side Out カク

第001・0話 妖精の尻尾・・・前半（後書き）

なんだか疲れてきました天翔る堕天使です。（・D・）y・

若干ですが具合があまりよろしくない状況です。

それでも頑張って行きまっしょい！

b y天翔る堕天使より。

## 第001・0話 妖精の尻尾・・・後編

Side ルーシィ

あたしはあの後ナツ達と分かれて公園のベンチに座っている。手に持つてるのは魔法専門誌の週刊ソーサラー。あたしの入りたいギルドの情報も載っていた。

ルーシィ

「まーた妖精の尻尾フェアリーテイルが問題起こしたの？ 今度は何？ デボン盗賊一家壊滅するも民家7軒も壊滅・・・・・・・・」

これがあたしの入りたいギルドの名前。でもまだ続いている記事の内容では、たったそれだけであたしは限界だった。

ルーシィ

「あははははっ！！！！ やりすぎー！！！！」

あたしはこらえきれずにベンチに仰向けになり足をばたつかせながら笑う。そして今度はグラビアページを広げると、

ルーシィ

「あ！ グラビア、ミラジェーンなんだ。妖精の尻尾フェアリーテイルの看板娘、

ミラジェーン……こんな人でもめちゃくちやったりするのかしら？」

そこには白い髪に青い目をしたきれいな身体スタイルをした1人の女性の水着姿が写っていた。

ルーシイ

「ぷっ」

考えただけで噴出してしまふ。そしてあたしはその本を閉じながら呟いた。

ルーシイ

「てか……どうしたら妖精フェアリーの尻尾テイルに入れるんだろ？ やっぱ強い魔法覚えないとダメかなあ……面接とかあるのかしら？」

少しだけ不安になるあたし……それでも、

ルーシイ

「魔導士ギルド、妖精フェアリーの尻尾テイル、最高にかっこいいなあ。」

絶対にこのギルドに入る！と、あたしが決心をしていると後ろの茂みから、

サラマンダー  
火竜

「へえー……君……妖精フェアリーの尻尾テイルに入りたいんだー。」ガサツ

ルーシイ

「……!」

後ろの茂みから人が現れた。

ルーシイ

「サ……サラマンダー  
火竜……!」

そう、さっきのいけすかない男が現れた。

サラマンダー  
火竜

「いやゝ探したよ……君のような美しい女性をぜひ我が船上パーティーに招待したくてね。」

ルーシイ

「は……はあっ!」

いきなり出てきて何いってんのよこの男は……まさか馬鹿?

ルーシイ

「言っておくけどあたしには魅了チャームは効かないわよ。魅力チャームの弱点は『理解』・・・それは知ってる人には魔法は効かない。」

一応あたしはこの男には警戒をしておく。

サラマンダー  
火竜

「やっぱりね！ 目が合った瞬間魔導士だと思ったよ。いいんだ、パーティーにさえ来てくれれば。」

あたしの態度に構えることなく火竜サラマンダーはおしゃべりを続ける・・・ていうか、何言ってるのこの男は、あたしがそれでついて行くとでも思ってるのかしら？

ルーシイ

「行く訳ないでしょ！ アンタみたいなえげつない男のパーティーなんて」

サラマンダー  
火竜

「えげつない？ 僕が？」

ルーシイ

「魅力チャームよ、そこまでして騒がれたい訳？」

サラマンダー  
火竜

「あんなのただのセレモニーじゃないか。僕はパーティーの間セ

レブな気分でいただけさ。」

・・・ただの馬鹿丸出しの男ね。

ルーシィ

「有名な魔導士とは思えないおバカさんね。」スタスタ

あたしが歩き出すと男は、

サラマンダー

火竜

「待つてよ！」

男が引き止めてきたがこの場に及んで何をするの？と思ったのに、男は次の瞬間にあたしは信じられないセリフを耳にした。

サラマンダー

火竜

「君・・・妖精の尻尾フェアリーテイルに入りたいんだろ？」

ルーシィ

「！」ピタッ

あたしが思わず立ち止まり男の方を振り向くと男は続けて、

サラマンダー  
火竜

「妖精の《フェアリー》尻尾テイルの火竜サラマンダーって……聞いた事ない？

ルーシイ

「……ある！！！！ あんた妖精の《フェアリー》尻尾テイルの魔導士だったの！！？」

サラマンダー  
火竜

「そうだよ。入りたいならマスターに話を通してあげるよ。」

あたしが聞くと、男はあのキメ顔で答えた……これはもうパーティに行くしかないわ！！

ルーシイ

「素敵なパーティになりそうねっ？」ずももも……

サラマンダー  
火竜

「わ……わかりやすい性格してるね……君……。」

ルーシイ

「ほ……本当にあたし妖精フェアリーの尻尾テイルに入れるの！！？」

憧れのギルドに入れると知ってあたしは嬉しかった。しかもあの有名な人物だったなんて……ナツの色紙貰っけばよかったな。

サラマンダー  
火竜

「もちろん。そのかわり魅力チャームの事は黙っといてね。」

ルーシイ

「はい、はい？」

サラマンダー  
火竜

「それじゃパーティで会おう。」

ルーシイ

「了解であります？……は！！！！疑似魅力ぎじ チャームしてたわ！！！！」

でもこれであたしの念願が叶った！あたし妖精フェアリーの尻尾テイルに入れるんだー！！！！

ルーシイ

・ 「入るまではあのバカ男に愛想よくしとかないとね。」ししし・

Side Out ルーシイ

Side カク

ナツ

「ぷはぁー！ 食った食った！！」

ハッピー

「あい。」

カク

「まさか昼飯にあれだけ食べたのに夕飯も同じ位食べるとはの・・・底無しか？」

ワシとナツ達は昼飯を食べ終えた後に別々に行動していたのじやが、街をぶらついてしているとナツがお腹を空かせて倒れていたんじや。仕方なくまたあのレストランに行き夕飯を食べ終えて、食後の散歩をしている。

ワシらが今いる場所は街が見渡せるところに位置する高台じや。

ハッピー

「そいや火竜が船上パーティーやるって、あの船かなあ。」

ナツ

「うぷ・・・気持ちワリ・・・。」

カク

「・・・何でナツは酔つとるんじや・・・。」

ハッピー

「想像したただけで酔うのやめようよ・・・。」

ワシとハッピーがナツに呆れていると近くにいた女性2人が何かを話している。

女1

「見て見て〜!!! あの船よ<sup>サラマンダー</sup>火竜様の船〜。あ〜ん、私もパーティー行きたかったあ。」

女2

<sup>サラマンダー</sup>  
「火竜?」

もう一人の女性が隣の女性に聞き返す。そして質問された女性は聞かれた女性にこう答えた。

女1

「知らないの? 今この街に来てるすごい魔導士なのよ……あの有名な妖精<sup>フェアリー</sup>の尻尾<sup>テイル</sup>の魔導士なんだって。」

あの女性は確かに言った……妖精<sup>フェアリー</sup>の尻尾<sup>テイル</sup>の魔導士<sup>サラマンダー</sup>の火竜と。

ナツ&ハッピー&カク

「「「!?!?!」」」ピーン

・・・ああ、そういえば原作ではそうじゃったの。

ナツ

フェアリー テイル  
「妖精の尻尾？」

ナツは呟きながら疑問譜を浮かべていた・・・そして船の方を数秒見てから、

ナツ&カク

「・・・うぶ・・・・・・・・・・・」  
フェアリー テイル  
「妖精の尻尾・・・」

ナツはまた船酔いでうずくまってしまったがワシと同じ様に疑問をいだいておる。

Side Out カク

Side ルーシィ

サラマンダー  
火竜

「ルーシィか・・・・・・・・・・・いい名前だね。」

ルーシー

「どおも。」ニッコニッコ

あたしは今、約束通り火竜のパーティーに来ている。ドレスに身を包んでいるから少しは可愛く見える筈。

サラマンダー  
火竜

「まずはワインで乾杯といこう。」

そういつて火竜はあたしのグラスにワインを注いでくれる。

ルーシー

「他の女の子たち放っておいていいの？」

サラマンダー  
火竜

「いーのいーの。今は君と飲みたい気分なんだよね。」パチン

そう、今ここにいるのは、あたしと火竜の二人だけ。他の女の子達は外で話をしているらしい。

火竜が軽く笑い指をはじくと、ワインが粒状になり数粒空中に浮かび上がる。

サラマンダー  
火竜

「口をあけてごらん。ゆっくりと葡萄酒の宝石が入ってくるよ。」

ルーシィ

「（うぎーーーーっ！！！！・・・でもここはガマンよ！！ガマンガマン！！）」

そう思いながらあたしは口を開ける。でもワインの粒が口に入りかけると、そのワインの粒から微量にだが妙な匂いが鼻についた。

ルーシィ

「！！」

あたしはおもわず立ち上がり口の近くにあったワインの粒を手で弾く。

サラマンダー

火竜

「！！」

ルーシィ

「これはどういふつもりかしら？・・・睡眠薬よね。」

そう、あたしが感じた違和感は恐らくだが睡眠薬の類が<sup>たぐい</sup>ワインに入っていたからだ。

サラマンダー  
火竜

「ほっほーう・よくわったね。」

ルーシイ

「勘違いしないでよね。あたしは妖精フェアリーの尻尾テイルには入りたいけどア  
ンタの女になる気はないのよ。」

あたしがそう言うのと目の前の男は急に態度を変えて、雰囲気も変  
わった。

サラマンダー  
火竜

「しょうがない娘だなあ。素直に眠っていれば痛い目みずに済ん  
だのに・・。」にたあ

ルーシイ

「え？」

あたしが疑問に思っていると後ろから両腕を掴まれてしまった。

ルーシイ

「！！！？」

そして後ろのカーテンが開くと両腕を拘束される。振り向けばそ  
こには人相の悪い男が何十人も出てきた。

子分1

「おーさすが火竜さん。」

子分2

「こりや久々の上玉だなあ。」

ルーシィ

「な、何なのよコレ!!! アンタたち何!!!?」

あたしは叫びながら抵抗するが腕の拘束は簡単には外れない。すると火竜はあたしのあごを掴み自分の方へ向けた。

ルーシィ

「!!!」

サラマンダー

火竜

「ようこそ、我が奴隷船へ。他国に着くまでおとなしくしていてもらつよ、お嬢さん。」

ルーシィ

「えっ!!!?・・・ボスコ・・・ってちょっと・・・!!!  
妖精の尻尾は!!!?」

あたしは動揺しながら確認をすると、こいつは開き直ったかのよう  
うに言い出した。

サラマンドー  
火竜

「言つたろ？ 奴隷船だと・・はじめてから商品にするつもりで君を連れ込んだんだ。あきらめなよ。」

そいつは悪びれずそう言った。

ル  
ー  
シ  
イ

「そんな……！！！」

あたしが何も言えず呆然としていたら、周りの男達が口々に話した。

子分  
1

「へへっ、火竜さんも考えたよな。魅了にかかっている女どもは自  
らケツをふって商品になる。」

子分2

「この姉ちゃんチャームは魅了チャームがきかねえみてえだし……少し調教が必要だな。」

子分3

「つ　つ　つ」

あたしは後ろから聞こえてくる男達の声にただ怯えるしかできなかった。

ルーシィ

「（や……やだ……うそでしょ……なんなのよ  
コイツ……！！　こんな事をする奴が……）」

サラマンダー

火竜はあたしの右太ももに手を伸ばし、<sup>ゲート</sup>門の鍵を奪った。

サラマンダー

火竜

「ふーん。<sup>ゲート</sup>門の鍵……星霊魔導士か」

男がつぶやくと、周りの男達も口々に質問をしていた。でも、あたしの耳には入らない。

サラマンダー

火竜

「この魔法は契約者以外は使えん……つまり僕には必要ないって事さ。」ポイ

男はそう言つて鍵を窓から投げ捨ててしまった。・チクショウ！  
コレであたしは何もできないただの女の子だけど、

ルーシィ

「（これが、フェアリーテイルの魔導士か……！）」

あたしの憧れていたギルドがこんなにも最低な奴等がいた事に怒りで震えるのが精一杯だった。目から涙を流し、齒を食いしばって火竜を睨むけど拘束は外れない。

サラマnder  
火竜

「まずは奴隷の烙印を押させてもらうよ。ちょっと熱いけどガンしてね。」

男はそういつて奴隷の烙印が彫り込んである鉄の棒をあたしに押し付けようとしてくる。でも、あたしはそんな事よりも、

ルーシィ

「（魔法を悪用して……人を騙して……奴隷商ですって！！？）……最低の魔導士じゃない。」

あたしがそんな事を口にはしていると横にある『ドアの無い壁』が開きだした。

カク

「ワシもルーシィに同感じゃの。」

Side Out ルーシィ

Side カク

カク

「（どうやら間に合ったかの。）ワシもルーシィに同感じゃの。」

バキッ！！

その瞬間に『天井』には穴が空き、『ドアの無い壁』がまるでドアが有ったかのように開き、

ズシンッ！！

因みに振ってきたのはマフラーをした男の子・・・ナツ。壁から出てきたのは・・・ワシじゃ。そう、ワシらは変な所からルーシィを助けにこの船に乗り込んだ。

サラマンドー  
火竜

「ひ・・・昼間のガキ！！？・・・それにあの時の変な男！！？」

ルーシィ

「ナツ！！？カクさん！！？」

サラマンダー

火竜は驚いたのかルーシイから離れている。ルーシイはさっきの衝撃のお陰で拘束から外れた手で涙をぬぐう・しかし、

ナツ

「おぶ・・駄目だ、やっぱ無理。」

ルーシイ

「えーっ！っ！？ かつこわるーっ！っ！！」

カク

「何でお主は着いてきたのか全く分からんの。」

ナツは壁に倒れ掛かってしまい酔ってしまったようじゃ。お主はルーシイを助けに来たのかボケをかましにココまで来たのか分からん。

サラマンダー

火竜

「な・・何だコリヤ一いっ体・・・！！？ 何で空からガキが降ってきたり壁から人が出てくるんだ！！？」

子分2

「しかもこいつ酔ってるし。」

ナツ

「おおおおおおおおお。」

カク

「はあ、これならワシが1人で片付けた方が良かったかの……」

ワシが1人で後悔をしているとナツが落ちてきた穴からハッピーが顔を出してきた。

ハッピー

「ルーシィ、何してるの?」

ルーシィ

「ハッピー!!? 騙されたの!!!  
妖精の尻尾フェアリーテイルに入れてくれるって……それで……あたし……」

ルーシィがりのままの事を伝えたと、ナツが『ピクッ』と動いた。

ルーシィ

「てか……アンタ羽なんてあつたっけ?」

カク

「細かい事は後にせんか? ルーシィ。」

ハッピー

「カクの言う通りだね……逃げよ。」ピューーギューウウウン

ハッピーはルーシイの腰に尻尾を回してナツの開けた穴から飛んで行ったのだが、まだナツとワシが船に残っていた。

ルーシイ

「わっ．．ちょ．．2人はどーすんの！！？」

ハッピー

「オイラ1人しか運べないし．．何とかなるよ。」

ルーシイ

「あら．．」

サラマンダー  
火竜

「逃がすかあっ！！！！」ボマツ！ゴーオン！

サラマンダー

火竜の攻撃はギリギリの所で避けられたらしく、子分達にルーシイを評議員に通報される前に捕まえると言っているようじゃ．．．意外とハッピーは薄情者じゃの。

暫くして銃の音が止んだと同時にナツがなにかを喋り出した。

ナツ

「フェア．．リイ．．．テイル．．．おま．．え．．が．．」

「

サラマンダー

火竜

「あ？」

＼Side Out カク

＼Side ルーシィ

今あたしはハッピーに掴まれて飛んでいるのだが、さっきあたしの腕を掴んでいた男達があたし達に銃を発砲してきた。

ハッピー

「ルーシィ聞いて。」

ルーシィ

「何よこんな時に!?!」

ハッピー

「変身解けた。」

この猫は一体何を言っているのかしら!? 空中で飛んでいられる為の羽がこのタイミングで解けちゃったの!? あたしは思わず。

ルーシィ

「くそネコーー!?!?!」

と大声で叫んでいた。もちろんあたしとハッピーはそのまま海に真っ逆さまに落ちました。

ルーシー

「（あんなのが妖精の尻尾フェアリーテイルだったなんて・・・いや・・・それより女の子たちをたすけないと。）」

あたしは海に落ちた自分の『門の鍵ゲート』を探していた。

ルーシー

「（あった！！！！ 浅いトコでひっかかっててくれた？）」

あたしはひとまず水面にでて『門の鍵ゲート』を片手に握りしめた。

ルーシー

「ぶはっ！！！！ いくわよ・・・開け！！！！宝瓶宮ほうびんぐうの扉！！！！  
アクエリアス！！！！」

あたしが手に持っている鍵は『黄道十二門おうだうじふにもん』の一つなんだけど・・・こいつかなりのワガママなのよね。まあ、その分強力だから良しとしとこう。

ハッピー

「すげえー！！！！！」

ルーシー

「あたしは星霊魔導士<sup>せいれいどうし</sup>よ。門<sup>ゲート</sup>の鍵を使って異界の星霊たちをよべるの・・さあアクエリアス！あなたの力で船を岸まで押し戻して！  
」

アクエリアス

「ちつ。」

ルーシー

「今『ちつ』って言ったかしらアンター！！！　ねえ？」

ハッピー

「そんなトコにいつかなくていいよおー。」

なんて生意気な星霊なのかしら！？ホントにイライラさせるのが得意な奴よこいつは。

アクエリアス

「うるさい小娘だ・・・。一つ言っておく、今度鍵落としたら殺す。」「ゴゴゴゴッ！！！！」

あ、なんだかものすごく怒ってるように感じるんですけど・・。

ルーシー

「ご……めんなさい……。」

あたしが謝ると同時にアクエリアスはあたし達と船を岸まで押し戻そうと大きな波をおこした。分かっていると思うけどあたし達はアクエリアスの真横にさっきまでいた。

ルーシー

「あたしまで一緒に流さないでよオオオツ!!!!」

そうしてあたしとハッピーは岸まで押し戻された船の甲板なや打ち上げられていた。

ルーシー

「あんた何考えてんのよ!!!! 普通あたしまで流す!!!!?」ムキ!!!!!!

アクエリアス

「不覚……。ついでに船までながしてしまった。」

ルーシー

「あたしを狙ったのか!!!!」

なんて危険な星霊なの!!!!?……。なんだかあたし命の危機だ

つたみたいです。

アクエリアス

「しばらく呼ぶな。一週間彼氏と旅行に行く・・彼氏とな。」ス  
ウツ

ルーシー

「2回言っとなっ!!! なーんて勝手な奴なのかしら!!!」

ハッピー

「あまり関係良好じゃないんだね。」

ルーシー

「でもやったわ!! この騒ぎを聞きつけて軍の人達が来たら女の子達もかすかるわね・・・あたしって」

あたしが自分だけの世界に入り込んでいると、後ろにいたハッピーがナツとカクさんを置いてきたのを思い出したらしく船の中へ入って行った。

あたしもハッピーを追いかけてくつちゃね。

Side Out ルーシー

Side カク

カク

「（ふむ、そろそろアクエリアスの横波が来る頃か・・・）それでは皆さん！」

サラマンダー  
火竜

「んっ？」

子分達

「なんだ？」

ワシは近くにあつた窓の外を見ながらタイミングを計りながら一言だけ言った。

カク

「急な横波に・・・ご注意を。」ペコリ

ザッ！！！！ ザアアアアアアア！！！！

ワシが言い終わると同時に船は大きく傾きながら岸まで押し戻された・・・途中で外からルーシーの叫び声が聞こえたのは気にせんでおこつかの。

そして完全に船が止まったところで、サラマンダー火竜は慌てているようじゃ。ナツが元に戻ったのか、さっきよりもだいぶ顔色が良くなっている。

ナツ

「止まった・揺れが・止まった。」

カク

「そのようじゃの。」

ナツは少しふらつきながら立ち上がりワシと一緒に、サラマンダー火竜達を睨んでいるとルーシイが心配そうに入って来た。じゃがワシらの雰囲気で言葉が途中で終わり少し驚いておるようじゃ。

ナツ

「・・・・」オオオオオオ

カク

「・・・・」ゴゴゴゴゴゴ

よく見ればナツも戦闘体制になっていて、いつもの『闘う』表情になっておる。

サラマンダー  
火竜

「小僧・・それに昼間の長っ鼻・・人の船に勝手に乗ってきてちゃイカンだろお・・あ？」

サラマンダー  
火竜が頬を掻きながらワシらに言うてくる・・・・今こいつワシ

の『鼻』に触れたの・・・よし殺しても構わんぞナツ」  
ナツは上着を脱いで両肩を出した格好になったので、ワシは・・・  
・特に無し！！！！

サラマンダー  
火竜

「オイ！！ こいつ等をさっさとつまみ出せ。」

子分1～4

「「「「はっ！！」「」「」」

サラマンダー

火竜の指示でナツには2人、ワシにも2人此方に向かってくる。

ルーシイ

「いけない！！！！ ここはあも「大丈夫」！」

ハッピー

「いいそびれたけどナツもカクも魔導士だから。」

ルーシイ

「えっーーーーーっ！！？」

恐らくじゃが、ルーシイが星霊をだそうと鍵を手なやするが、ハッピーがそれを止めさせた。・・・リアクションが素晴らしいの。ワシがそんな（マヌケな）事を考えていたら男達はワシらに近づいてくる・・・ナツのセリフにかぶるかの。

ナツ&カク

「「おまえが（お主が）妖精の尻尾の魔導士か（魔導士かの）。」

」

ナツとワシが火竜に聞く。

サラマンダー  
火竜

「それがどうした!？」

ナツ&カク

「よく（黙って）ツラ（顔を）見せろ（見せんかい）。」

ワシらが言い終わると同時に2人の男がワシらに殴りかかってきたのだが、

ゴンッ！ ギンッ！

ナツは2人を片手で簡単に弾き飛ばしながら・・・ワシは霸王色の覇気で2人を威圧をして足元に気絶させ、

ナツ&カク

「オレは（ワシは）妖精の尻尾のナツだ（カクじゃ）!!!おめ

えなんか（お主など）見たことねえ（見た事が無いのう）！……！」

サラマンダー  
火竜

「なっ！……！」

ルーシイ

「え？」

ワシらが自己紹介（？）をすると火竜は驚きルーシイが啞然としていた。

ルーシイ

「妖精の尻尾  
フェアリーテイル  
！！？ナツとカクさんが妖精の尻尾の魔導士！！？」

かなり驚いたのだろうか、ルーシイはまだ口を大きくあけて叫んでおるが……なんじゃかはしたくないのう、ルーシイ。

子分5

「な……！！！！あの紋章……！」

子分6

「本物だぜボラさん……！」

サラマンダー  
『火竜』から『ボラ』

「バ……バカ……！！その名で呼ぶな……！」

『サラマンダー』  
『火竜』は『ボラ』という奴じゃったらしいの……つまり嘘  
をついておったのか。

ハッピー

「ボラ……紅天のボラ……数年前に『プロミネンス巨人の鼻』たいたんノーズっていう魔  
導士ギルドから追放された奴だね。」

ルーシイ

「聞いた事ある……魔法で盗みわ繰り返してて追放されたって。」

カク

「……簡単に言えば『火の魔法が使えるが卑怯者でクソメン』じ  
やの。」

ハッピーがボラの情報を伝えるとルーシイが更に詳しい情報を伝  
えた……。そしてワシが話の腰を折り終わったところでナツが、

ナツ

「おめえが悪党だろうが善人だろうが知ったことじゃねえが妖精フェアリー  
の尻尾を騙るのはゆるさねエ」オオオオ

ナツは齒を食いしばり怒りを必死に溜めている。ワシもそれに便  
乗したのだが……

カク

「確かにナツの言う通りお主は許せないの・んっ？いやまてナツ。『悪人だろうが善人だろうが知った事じゃねエが』って善人は別に構わんじやないんか！？」

ワシは『ボケ』をしたのか分からんがナツに『ツツコミ』をいれていると、痺れを切らせたのかボラが攻撃をしてきた。

ボラ

「ええいつ！！！！ゴチャゴチャうるせえ奴等だ！！！！」ボグウオ！！

そう言っただけボラは炎をワシとナツにむかった放った。

ルーシィ

「ナツ！！！！カクさん！！！！」

ルーシィが動き出そうとするがハッピーが止めた。ワシは避けなくても平気なのじゃが<sup>ソル</sup>剃を使いボラ達の後ろから気づかれないように観察をしていた。

ボラ

「フンっ！！」

ボラが鼻で笑っておるのだがワシは避けたから平気で、ナツも実際のところ無傷なのじゃがの・・・それがきつとお主の最後のキメ顔じゃの。

ナツ

「まずい。」ゴオオオオオオ

カク

「おそい。」

ナツが呟きながら火を食べている。ワシが後ろから声を掛けてボラ達を後ろを向かせた後に、ボラ達の目の前で消えてルーシイの横に移動した。

ナツ

「何だコレあ。おまえ本当に火の魔導士か？　こんなまずい？　火？　は初めてだ。」もぐもぐがぶつもぐもぐ

カク

「じゃからあの時言ったじゃろっ・・・『そんなに強くは無い』・・・とな。」

ボラ

「・・・・・・・・！！！！！！」

ルーシィ

「はア！！！？」

ボラとルーシィ、そしてボラの子分達は目の前で起きた事に驚く事しかできないらしい。

ナツ

「ふー！ーごちそう様でした。」ゴオオオ

そしてナツは自分が受けた？火？を全て食べきった。

ボラ

「な・・・なな・・・何だコイツはー！ーっ！！！？」

子分達

「火・・・！！？ 火を食っただと！！？」

ハッピー

「ナツには火は効かないよ。」

ハッピーが口を挟んで喋ったが・・・誰もワシには突っ込まないようじゃの。

ルーシィ

「こんな魔法見た事ない！！　っていつよりカクさんも何したんですか！！？」

カク

「んっ？　ワシはただ単にきた攻撃を避けただけじゃがの。」

ワシとルーシィのちよつと楽しいお話をしているとナツが魔力を高めているようじゃ。

ナツ

「食ったら力が湧いてきた！！！！　いづくぞおおおおっ！！！！」

子分1

「こいつ・・・まさか・・・ボラさん！！　オレあコイツ見た事があるぞ！！！！　「はあ！！？」　桜色の髪に鱗みてエなマフラー・・・間違いねエ！！！！コイツが・・・本物の・・・」

ドゴゴゴオオオオオ！！！！！！

しかし1人の男がボラに伝えるよりも早くナツの魔法が奴等にくらった・・・そしてその姿はまるで、

ルーシィ

サラマンダー

「火竜・・・」

カク

「成る程のう．．確かに『アレ』は火竜<sup>サラマンダー</sup>じゃな。」

そしてナツは目の前にいるボラに狙いをつけて、

ナツ

「よく覚えておけよ。これが妖精<sup>フェアリー</sup>の尻尾<sup>テイル</sup>の．．．．．魔導士だ！．．．！」ゴッ

ナツはそう言いながらボラの頭を『火を纏った』拳で床に叩きつけた。そしてここからハッピーがメインの解説を始めようかの。

ルーシイ

「火を食べたり火で殴ったり．．．本当にこれ．．．魔法なの！？」

ハッピー

「竜の肺は焰を吹き竜の鱗は焰を溶かし竜の爪は焰を纏う．．．これは自らの体を竜の体質へと変化させる『太古<sup>エンシェント</sup>の魔法<sup>スベル</sup>』．．」

ルーシイ

「なにそれ！！？」

カク

「元々は龍迎撃用の魔法らしいんじゃないよ。」

ルーシィ

「・・・・・・・・・・・・・・・・あらま。」

ハッピー&カク

ドラゴンスレイヤー  
「滅竜魔法！！！」 イグニールがナツに教えたんだ。（教えた魔法じゃ。）「」

そんな事を言っておるとナツは誰かを壁ごと外に蹴り飛ばして出ていってしまった。

ルーシィ

「竜が竜たいじの魔法教えるってのも変な話ね。」

ハッピー

「ぐわばっ！！」

ルーシィ

「疑問に思っていないかったのね・・・・滅竜魔法・・・・すごい・すごい・・・・けど、やりすぎよオオオッ！！！！！」

船の外を見るとナツが敵を倒しながら丸太を持って振り回してある・・・・・・・・いや、『街を壊しながら』が抜けておったかの。

ハッピー

「あい。」

ルーシィ

「『あい』じゃないっ！……！」

しばらくすると鎧を身に纏った軍隊が此方にやって来たようじゃ・  
・…まずい！……！

カク

「ナツ！！ 軍隊が大勢来おったぞ！！」

ナツ

「やべ！！！！ 逃げんぞ。」

ルーシィ

「！！！！ 何であたしまで……！！！！？」

ワシがナツに声をかけるとナツはルーシィの手を引っ張りながら  
走っている。

ナツ

「何故と言われても・…妖精<sup>フェアリー</sup>の尻尾<sup>テイル</sup>に入りたくないのか？」

ワシの言った事にルーシィが驚いて『キョトン』としていると、  
手を引っ張っているナツが

ナツ

「オレたちの  
ギルド  
妖精の尻尾入りてんだろ？ 来いよ。」

ルーシイ

「うん！ー！」

こうしてワシらは軍隊から逃げ切った後ワシらのギルドへと帰って行った。もちろん帰りも列車に乗ったからナツは酔ってしまったのはお約束。

＼Side Out カク

＼Side Out ？？？

？？？1

「まゝた妖精フェアリーの尻尾テイルのバカ共がやらかいおった！ー！ 今度は港半壊ですぞ！ー！ 信じられますか！？」

？？？2

「いつか街一つ消えてもおかしくない！ー！」

？？？3

「演技でもない事言わんでくれ．．．本当にやりそつじゃ。」

???4

「罪人ボラの検挙の為と政府には報告しておきましたかね。」

???3

「いやはや・・・」

???5

「オレはああゆうバカ共結構好きだけどな。」

???1

「貴様は黙つとれ!!!」

???4

「確かにバカ共じゃが有能な人材が多いのもまた事実。」

???6

「だからこそ思案に余る。」

???7

「痛し痒しとはこの事ですな。」

???5

「放っておきやいーんすよ。」

???1

「何だと貴様!!!!」

???5

「あんなバカたちがいないと・・・この世界は面白くない。」

} Side Out ? ? ?

第001・0話 妖精の尻尾・・・後編（後書き）

今回の話はなんだか長かった・・・そんな気がする天翔る墮天使です。

早く話を進めたいのですが、思う様にいかないのが現実です。（  
；D、）

ではまた次回！

b y天翔る墮天使より。

第002・0話 総長あらわる！・・・前半

Side カク

ルーシィ

「わぁ・・・大っきいね。」

ハッピー

「ようこそ妖精の尻尾<sup>フェアリーテイル</sup>へ。」

ハッピーが飛び上がりながら言うのでワシもこのギルドの気をつけておく事をルーシィに囁いた。

カク

「入ったらすぐ正面にあるカウンターに行く事をワシは進める。」  
ボソツ

忘れているかもしれないがナツはあの『モブ出っ歯』の情報でハルジオンの街に行ったのじゃが、実際のところは勘違いでありナツが火竜と他の街から呼ばれていたそうじゃ。

ナツはきつとその『モブ出っ歯』を見つけたら何かしらのアクションをするじやろう。

ルーシィ

「？ はい、分かりました・・・？」

Side Out カク

Side ギルド内

ギルドの中はいつもと変わらず騒がしいようだ。

モブ1

「ミラちゃん！！ こっちビール3つお願い！！」

ミラ

「はいはい。」

今返事をした従業員が妖精の尻尾の看板娘でもありグラビアでもある『ミラジエーン』。

そしてカクの彼女でもある。ギルドのメンバーは特に反対はしなかったが、何人かは羨ましがっていた。

ワカバ

「ミラちゃん」

ミラ

「はいはい何かしら?」

ワカバはそう言ってミラを自分の方に振り向かせると、煙魔法で複数のハートマークを煙で作った。

ワカバ

「今度オレとデートしてよお。」ポわわ〜ん

モブ2

「あ!ズリイ抜けがけすんなよ。」

ミラ

「もあ・・・。」

ばっ!ばっ!ばっ!

ワカバがミラに言っているとミラは自分の得意な変身魔法を使った。

ミラ

「あなた奥さんいるでしょ?」ぽんっ

ワカバ

「どわーっ!!」うちの嫁なんかに変身するなよ!!!」

一同

「「「「あははははっ。」」」」

ミラ

「あ」ぽわっ

ミラがワカバの誘いを上手く流した後に、入り口にいた人影に気がついたのか変身魔法を解いた。

＼Side Out ギルド内

＼Side カク

ミラ

「あ」ぽわっ

ナツ

「ただいまーっ！ー！ー！」くわっ

ハッピー

「ただー。」

カク

「ただいま……ハッピー、最後までちゃんと说不いのか？」

ナツがあゝの『モブ出っ歯』を見つけたらしく全力で扉をあけて中に入って行ったの……『モブ出っ歯』は逃げるんじゃない！

ミラ

「ナツ、ハッピーおかえりなさい。」

モブ出っ歯

「またハデにやらかしたなあハルジオンの港の件……新聞に載……………で。」

ナツ

「てめえ！！！！サラマングー火竜の情報ウソじゃねエかつ！！！！」バキヤ

モブ出っ歯

「うごごつ。」

『モブ出っ歯』が喋っている最中にナツは『モブ出っ歯』の顔を蹴り飛ばした。当たり前だが机も一緒に蹴り飛ばした。

ミラ

「あら……ナツが帰ってくるとさっそくお店が壊れそうね……うふふ。」

ワカバ

「壊れてるよー！！！！」

ナツがモブ出っ歯を蹴り飛ばした為なのかハッピーも別の所へ飛んで行った……段々じゃが『喧嘩』の波紋が広がっている。

カク

「…………マズイの。」

ルーシイ

「すごい……あたし本当に……妖精の尻尾フェアリーテイルに来たんだあ。」

ルーシイは後ろで歓喜の声を漏らしていた……ルーシイ、目の前の状況を良く見た方がいいぞ。これから酷くなっていく前に何とか進もうかの。

ダッダッダッダッダッダッ！

グレイ

「ナツが帰ってきたってえ！！？ てめエ……この間の決着ケリつけんぞ！！！」ずんっ

ルーシイ

「……！！！」

彼は『グレイ・フルバスター』。グレイの癖は変態的であるがギ

ルドのメンバーはほぼ慣れたらしいが・・因みに癖は『服を脱ぐ』事。

そしてグレイは今パンツ1枚ルーシーの前に立っておる。

力ナ

「グレイ……あんた何で格好で出歩いてるのよ。」

ル  
ー  
シ  
イ

⌈  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
⌋

グレイ

「はっ!!! しまった!!!」

力ク

「流石じやの『変態グレイ』。しかしパンツ1枚で歩くとは前よりは成長したの。」

もちろんグレイは癖で服を脱いでおるから悪気は全く無い。最初の頃は全裸で街を歩いておったから軽くお灸を据えておいた。

力ナ

「これだから品のないこの男どもは……イヤだわ。」

いじくいじくいじくいじくいじくいじくいじく

力ク

「……カナ、お主も樽で飲んでる時点で品の欠片も無いんじゃないか。」

ル  
ー  
シ  
イ

⌈  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
⌋

彼女は『カナ・アルベローナ』。見た目とは裏腹にかなりの大酒飲みらしく、『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup>の年間のお酒消費量の3割は彼女のお腹に入るらしい。

そしてお酒を飲む時は樽で飲む方が多いらしい。

グレイ

「オオウ！！！！ ナツウ！！！！ 勝負せエや！！！！」

ナツ

「服着てから来いよ。」

エルフマン

「くだらん。」

ル  
ー  
シ  
イ

!

ルーシイの後ろに立っている男は『エルフマン・ストラウス』。  
右目の下に傷があり、学ランを着ている大男。実力は『妖精の尻尾』  
フェアリー テイル

でも上位に入るんじやが、ここ一番で力が出せない。何かと『漢』を主張する暑苦しい性格じやが情に厚く涙もろい。

エルフマン

「昼間っからピーピーギャーギャーガキじゃあるまいし・・・漢なら拳で語れ!!!」

ルーシィ

「けっきょくケンカなのね・・・」

ナツ&グレイ

「邪魔だ!!!」どつごおおお!

ルーシィ

「しかも玉砕!!!」

ロキ

「ん?騒々しいな。」

ルーシィ

「あ!!!『彼氏にしたい魔導士』上位ランカーのロキ!!!」

彼は『ロキ』。眼鏡をかけた美青年で、『彼氏にしたい魔導士』ランキングの上位を常にキープしているが本人はかなりの女好きらしい。

正確には魔導士ではなく、その正体は黄道十二門の星霊の1人、獅子宮のレオである。この事を知っているのはワシぐらいじゃ。

ロキ

「まざってくるねー？」

女1

「がんばって〜？」

ルーシイ

「（ハイ消えたっ！！！！）な……なによコレ……まともな人が1人もいないじゃ……」

ルーシイが悲しさのあまり床に倒れ込んだのを椅子に座って見ていたらミラがワシに声を掛けた。

ミラ

「カクもお帰りなさい……あらあ？カク、新入りさん？」

カク

「ああ、そうらしいんじゃないがこのギルドの実態を知って落ち込んだるようじゃ。ルーシイ、顔をあげんか。」

ルーシイ

「はい……えっ！！！！！！ミ……ミラジェーン！！！！！！」

ミラ

「こんにちは、新入りさん。」ニコッ

ミラが最高の笑顔でルーシーを迎えたのじゃが今はそれよりもルーシーは気になる事があるみたいじゃ。

ルーシー

「キャー！！！！ 本物？ はっ・・・ア・・・アレ止めなくていいんですか！！？」

ミラ

「いつもの事だからあ？ 放っておけばいいのよ。」

ルーシー

「あららら・・・」

ルーシーがミラの発言に対して少し呆れていると、横から『お酒のビン』が勢い良くミラに飛んで来たのだが本人はまだ気づいていない。

ミラ

「それに・・・」よつと。「キャッ！！！！」

カク

「大丈夫かのミラ？ 怪我はないか？」

ミラ

「あ・・・ありがとう・・・カク、手が当たってる。／／／」ボソッ

カク

「！す、すまん！」

今のは『不可抗力』であるので決してワザとではないのでご注意ください！流石にワシでも『時と場所』は考えている！……後でちゃんと謝ろうかの。

そんな事を考えていると 그레이 がナツに殴り飛ばされてルーシーの方に飛ばされたのじゃが……パンツは何故かナツが持っていた。

그레이

「あーっ！！！！ オレのパンツ！！！！」

ルーシー

「こっち向くなー！！！！」

그레이

「お嬢さんよかったらパンツを貸して……貸すかーっ！！！！」

「

그레이 は相変わらずの変態じゃった。何でも良いから布でも腰に巻いておれ。

ロキ

「やれやれ……デリカシーのない奴は困るよね。ところで君どこのモデル？」

ルーシィ

「なにコレ!!?」

エルフマン

「漢は拳でえーーーーーっ!!!」

ナツ

「邪魔だつての。」

皆が殴り合いの喧嘩がだんだん過激になっていき嫌な予感がしてきた。

カナ

「あーうるさい。落ち着いて酒も呑めないじゃないの。あんたらしい加減に………しなさいよ………」ピキィ

グレイ

「アツタマきた!!!!」コオオオオ

エルフマン

「ぬおおおおっ!!!!」ボグオオオオオ

ロキ

「困った奴等だ……」キイイイン

ナツ

「かかって来いっ!!!!!!」ゴボオアア!!!!!!

カナはカードを片手に、グレイは手と手を合わせて、エルフマンは右腕を変化させ、ロキは指輪を、ナツは両手に火を纏いながら魔法を喧嘩につかおうとしようとしておる。

ルーシィ

「魔法！！！？」ぐもっ

ミラ

「これはちょっとマズイわね。」

ルーシィは目の前の事に驚きミラは少し冷や汗を流しておる。そしてワシは

カク

「あれ位ならワシ1人で大丈夫じゃろう・・・問題はその後のアフターケアじゃの。」ニヤッ

ルーシィ

「何をするつもりなんですか！！？」

ワシが冗談で言ったつもりなのにルーシィは本気で驚いておる・・・そんなにワシは今変な事を言った覚えはないんじゃないかの。  
そんな事しているとギルドの入口で屋根につく程の大男が現れた・・・マスターじゃった。

マカロフ

「そこまでじゃ……やめんかバカタレ!!!!!!」

ルーシイ

「でか—————っ!!!!!!」

マスターの怒りの声と、ルーシイが驚いた声がギルドに響き渡ると、

一同

「……………」

ミラ

「あら……いたんですか？マスター総長。」

ルーシイ

「マスター!!?」

ギルドの皆が一斉に静かになったがミラのマイペースな一言にルーシイが突っ込んだ。そしてほぼ全員がまるで何事もなかったかのように、

グレイ

「ちつ。」

エルフマン

「フンッ。」

ロキ

「びつくりしたねー。」

女1

「ねー？」

カナ

「酒。」

それぞれに動き出したのじゃが若干1名の様子が違ったようじゃ。

ナツ

「だーっはっはっはっ！……みんなしてビビリやがって！……！  
この勝負はオレの勝ぴっ」

ズシンッ

ルーシイ

「……！！」

カク

「あー……どんまいじゃの。」



マスターのまさかの返答にギルドのメンバーが焦っている。やろ  
うと思えば出来るんじやが、最悪の場合は『永遠の眠り』につく  
んじやがの。

マカロフ

「む、新入りかね。」

ル  
ー  
シ  
イ

「は・はい・」

マスターはルーシイなは気付いたのか声を掛けるとルーシイは緊張してしまい震えておる。そんなに緊張する事ないんじゃないかの。

マカロフ

[illegible]ル  
ー  
シ  
イ

「ええー！！？」

先程まで屋根までの大きさだったのじゃがルーシの膝ぐらいの大きさまで縮んでしまいルーシは驚いたようじゃ。

マカロフ



「まずは・・・ 그레이、密輸組織を検挙したまででもいいが・・・その後街を素っ裸でふらつき、拳句の果てに干してある下着を盗んで逃走。」

그레이

「いや・・・だって裸じゃマズイだろ。」

カク

「그레이、今問題にしているのは『なぜ裸になるか』じゃ。」

ワシは出会ってから全く変わらない 그레이に呆れとる。

マカロフ

「エルフマン！！ 貴様は要人護衛の任務中に要人に暴行。」

エルフマン

「『男は学歴よ』なんて言うからつい・・・。」

カク

「そこは殴らなければ『漢』じゃたの、エルフマン。」

マスターはそのまま紙に書いてある内容を読み続けた。

マカロフ

「カナ・アルベローナ。経費と偽って某酒場で呑むこと大タル15個しかも請求先が評議会。」

カナ

「バレたか……………」

ロキ

「ロキ……評議員レイジ老子の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害買収の請求がきておる。」

カク

「流石じゃのロキ。」

ワシがメンバーのやった内容を他人事の様に聞いていると、マスターが深い溜息を吐いた。

マカロフ

「はあ……人事のようになっているが、カク。お前もなんじゃ。」

「

カク

「何じゃと!?!」

マスターの次の指名がワシに向いてしまった……なぜなんじゃ!?!? ワシが一体全体何をしたというんじゃ!?!!

マカロフ

「20個程の闇ギルドを壊滅させたのは良かったんじゃが・

その闇ギルドのマスターが全員何かに怯えており未だに事情聴取が全くとれておらんつ！！！」

カク

「……………あ、その事じゃったのか。」

ワシは別に謝る気は全くないんじゃ。先に相手のギルドが喧嘩を売ってきたからそれをワシが高く買っただけじゃからワシは悪くないはずじゃ。

マカロフ

「それにあちこちの地形を勝手に変えるんじゃないっ！！ 地図の変更を一体あと何回すれば良いんじゃ！！」

カク

「別にワシは地形を変えたくて変えておる訳では無いんじやがの。」

ワシは最後に付けたされた内容にも悪びれる必要も無い。あれは相手のギルドの建物が大きかったからキッチンと平地にただけじゃ。

マカロフ

「そしてナツ…………デボン盗賊一家を壊滅するも民家7軒も壊滅、チューリー村の歴史ある時計台の倒壊、フリージアの教会全焼、ルビナス城一部損壊、ナズナ渓谷観測所崩壊により機能停止、ハルジオンの港を半壊。」

ルーシー

「（本で読んだ記事はほとんどナツだったのね・・・）」

やはりナツは相変わらずの結果じゃの。多分じゃろうがギルドで一番の壊し屋じゃろう。

マカロフ

「アルザック、レヴィ、クロフ、リーダー、ウォーレン、ビスカ・  
etc・・・貴様等ア・・・ワシは評議員に怒られてばかりじゃぞあ・  
・・・」ぶるぶるぶる

他のメンバーにもマスターは簡単に言っていく。その後マスターはプルプルと震えだし、ギルドの皆は怒られると思ったのか暗い顔をしてる。

ルーシーに至ってはその雰囲気では怯えておる。

マカロフ

「だが・・・評議員などクソくらえじゃ！」ボツ

ルーシー

「え？」

マスターはそういうと左手に持っていた評議員からの大量の紙をすべて燃やして下に投げる。それをナツが犬の様に口に咥えて食べ

始めた。

ルーシイはマスターの言った言葉に対して驚いておる。

マカロフ

「よいか・理ことわりを超える力はすべての理ことわりの中より生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある‘気’の流れと自然界に流れる‘気’の波長があわさりはじめて具現化されるのじゃ。それは精神力集中力を使う・いや己が魂すべてを注ぎ込む事が魔法なのじゃ。上から覗いている目ん玉氣にしてたら魔道は進めん！」にん

そこまで言うのと、マスターは我慢が出来なかったのかに顔がにやけてしまった。

マカロフ

「評議員のバカ共を恐れるな。自分の信じた道を進めエい！！！！それが妖精フェアリーの尻尾テイルの魔導士じゃ！！！！」

マスターが言い切った瞬間にギルド内は皆の雄叫びで一気に盛り上がった・・まあさっきの事を気にしてるのは殆んどおらんじやろうな。

そして長い宴が始まった。

Side Out カク

第002・0話 総長あらわる！・・・前半（後書き）

最近前半後半にして投稿するからやたら面倒くさいです。  
Δ、y・

区切り方とか本当に悩んでいます、頑張ってください。

ではまた次回！

b y天翔る墮天使より。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4563z/>

---

FAIRY TAIL ～妖精の化物《フェアリーモンスター》～

2012年1月8日00時52分発行